

# 論語

武内義雄 译注



筑摩叢書 11

123.83

r

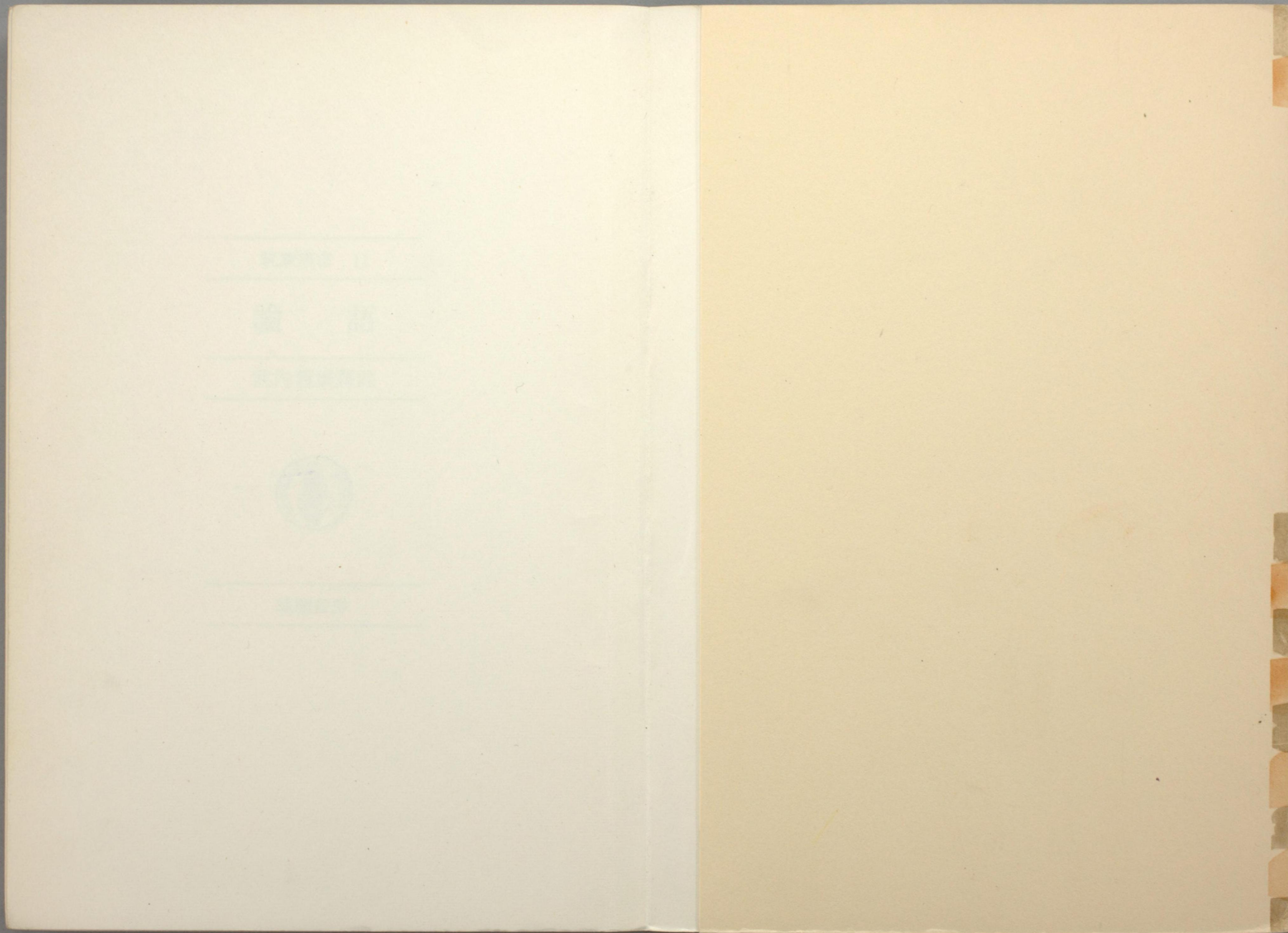
T2



00624967









---

筑摩叢書 11

---

論 語

---

武内義雄譯註

---



---

筑摩書房

---





123.83  
2  
T2



装幀 原 弘 (NDC)

624967

は し が き

論語は孔子の言行録である、孔子歿後、その門弟子等の耳にのこつた言葉、手控にかきとめておかれた教訓などを、後に至つて集録編纂したものである。その編纂は何人の手に出でたかも、何時頃出来上つたかも明かでなく、多少後人の修飾が加はつて居るらしく思はれるふしも少なくはないが、現在、孔子の風格と精神とを窺はうとすれば、これ以上確かな資料がない。そこで本國の中國は無論のこと、吾が國に於いても非常に尊重されて、その註釋書の多いことは眞に汗牛充棟といつてよい。

しかし一概に論語といつても、そのテキストは必ずしも一様でない。本書の首にかゝげた魏の何晏の論語序によると、漢の時代には古論・魯論・齊論の三種のテキストが存在して篇章の異同文字の出入も少なくはなかつたといはれ、その後の註釋家は、各自の見地から、これ等三種のテキストを取捨折衷して定本を作つたらしいから、いづれのテキストが、その眞を傳へて居るか明かでない。その上、二千餘年の久しきに亘つて幾千人幾百回の轉寫改刻を

1 は し が き



經たかも判らない程であるから、その間に脱落誤謬の生ずるのは寧ろ當然で、現行本論語に種々異同の存するのは、主としてこれ等の事情に原因するのであらう。さうして正當に論語を理解しようとすれば、先づ第一に種々の異本をあつめて校訂を試みなければならぬ筈である。

はじめて、この點に注意を拂つた學者は隋唐間の名儒陸德明で、彼の經典釋文三十卷の中には論語音義二卷があつて、當時存在した諸種の異本が校合されて居る。かうした試みはその後久しく等閑に附せられた様だが、清朝になつて考證學が一世を風靡するに及び、再び擡頭して、翟灝の四書考異や、阮元の十三經校勘記の如き校勘の専門書があらはれ、これと相前後して日本にも、山井鼎の七經孟子考文や、吉田篁墩の論語集解考異のやうな專著があらはれるやうに成つた。さうしてこれらの著述を通讀すると、同じ論語の中にも相當異本が多くて容易に歸一することが出来ない様に見える。然しこれ等異同を類別して整理すると大體二つの系統に分つことができる。第一は唐の文宗の開成年間に刻立された所謂開成石經に淵源するもので、中國の版本は種々あるがこれもこの系統に屬する。第二は奈良平安二朝の頃遣唐使によつて我國に將來された古寫本の流れを汲むもので、日本の古寫本は皆この系統から出て居る。更に古に溯ると前者は陸德明が採用した本文に近く、後者はその註記に引用

された異本と似て居る。さうしてこの二つの系統のテキストを後漢時代に刻られた熹平石經の殘字に對照すると、いづれの系統にも長所もあり短所もあつて早計に是非を決定することができない。そこで此本の原文は日本古寫本中最も由緒正しい清家の證本に基づき、これを開成石經と對校して異同を註記することにした。

論語の註釋書はその數甚だ多く、全部を通覽することは到底できない。然してその中特に代表的のものを擧げると、魏の何晏の集解と宋の朱子の集註とを數へなければならぬ。前者は魏の何晏が漢魏諸家の註解を集めて足りない點を補つたもので、一般にこれを古註と稱し、後者は南宋の朱子が北宋名儒の説を牢籠して一家の説としたもので、學者はこれを新註と呼んで居る。さうして古註を疏釋したものに、梁の皇侃の義疏、宋の邢昺の疏、清の劉寶楠の正義、潘維城の古註集箋等があり、新註を敷衍したもので、宋の趙順孫の纂疏、金履祥の考證、明の胡廣等の大全、清の王步青の匯參、簡朝亮の述疏、日本會津安駁の輯疏等があり、更に新註と古註とを取捨折衷して一家をなしたものに、清の黃式三の後案、日本の仁齋、徂徠、春臺、豐洲、息軒、一堂等があつて、近時出版された和譯論語の類は新註によつたものが多いやうであるが、私は主として古註に基づき潘維城の集箋により、その後の研究をも參考して譯讀を試みた。



譯讀は成るべく註釋を用ゐずに意味の諒解し得るやうつとめた。さうしてその結果、從來の慣例を破つて字書にも見えない訓み假名を附したところも少くない。例へば「抑」の字は從來皆「ソモソモ」と訓んで居るが、學而第十章の「求之與、抑與之與」に於ける「抑」の字は「或」の意であるから、直ちにこれを「アルヒハ」と訓み、述而第三十四章の「若聖與仁則吾豈敢、抑爲之不厭云々」に於ける「抑」は「然れども」の意であるからたゞちに「シカレドモ」と訓んだ如きその一例である。又舊來の訓み方では殆ど意味のない助詞を無理に訓んだと思はれるふしが多い。例へば學而第一章の「學而時習之」、及び、述而第三十一章の「揖巫馬期而進之」の「之」の字は、これに對する先行詞がなく單に助詞と見るべきであるが、古來の慣例では皆「コレ」と訓んで却て意義を晦澁ならしめてゐる、また述而第十八章の「不知老之將至也云爾」及び、第三十四章の「誨人不倦則可謂云爾已矣」に於ける「云爾」は單に語の終を示す助詞であるのに古來これを「シカイフ」と訓みて意を失つてゐる、かくのごとき助詞は皆訓まずにおいた。これらの點は相當骨を折つたつもりであるが、猶誤りを傳へる毀を免れ得ないかも知れぬ、もし誤りがあれば、それは全く譯讀者の不學の致すところ、博雅の教正を希ふ次第である。

## 目次

はしがき	一
凡例	二
論語卷第一	三
論語序	四
論語學而第一	八
論語爲政第二	三
論語卷第二	三
論語八佾第三	三
論語里仁第四	四
論語卷第三	四
論語公冶長第五	四
論語雍也第六	五
論語卷第四	五



論語述而第七	六
論語泰伯第八	七
論語卷第五	七
論語子罕第九	八
論語鄉黨第十	八
論語卷第六	一〇
論語先進第十一	一〇
論語顏淵第十二	一六
論語卷第七	二九
論語子路第十三	三〇
論語憲問第十四	四〇
論語卷第八	一五
論語衛靈公第十五	一五
論語季氏第十六	一六
論語卷第九	一七

論語陽貨第十七	一八
論語微子第十八	一九
論語卷第十	一九
論語子張第十九	二〇
論語堯曰第二十	二〇
解題	二五
再刊に際して	二九



論

語



凡 例

- 一、本書の原文は明經博士清原家の定本にもとづき、これを唐の開成石經に對照して、異同を註記した。原文の中方格□で圍んだ文字は清原家本にあつて石經になきを示し、行左に圈○を施した文字は、その下に異同或は字義を註してあることを示す。
- 二、清原家本とは仁治中清原教隆が寫定した本で、これを轉寫した古寫本が二部現存してゐる。その一は岩崎氏東洋文庫に祕藏さるゝ正和年間の鈔寫にかゝる本で、他の一は宮内省圖書寮尊藏の嘉曆年中の鈔寫に係るものである。又舊津藩侯の所藏に係る古寫本一通があつて、昔から菅公の筆と傳へられて居たが、その内容を吟味すると、これ亦教隆本を轉寫したものである。この本は大正十二年東京大震災に烏有に歸したと聞くが、天保年間これを縮臨摹刻した本があり、又嘉永年間北野學堂でその經文だけを摹刻した本がある。本書の原文はこの北野學堂本を正和鈔本と嘉曆鈔本とで校正したものである。但し諸本に異體俗字をかいて居るところは正體の文字に改めた。
- 三、開成石經は唐の文宗の開成年間に碑に刻りつけて大學に樹てられたもので、今も猶西安の碑林に儼存してゐる。こゝに對校した本は畏友石濱博士の所藏拓本を借用したのである。
- 四、清家本は王朝以來博士家で傳鈔したもので本邦所傳本の代表といふべく、開成石經は中國に於ける版本の源であるから、本書に於ては右二本を對照するにとゞめて、成るべく後世の異本に言及することをさけた。たゞ必要あるごとに釋文と漢石經とを引用した。さうして清家本と



石經とが違ふ場合、一一是非の判断を加へなかつたが、讀者は譯文によつて著者の判断を想像して頂きたい。

五、清家本には經文の間に註文を割註にしてゐるが、今はことごとくこれを省いた。たゞ每卷首篇題の下に「何晏集解」の四字を残して、その原本が集解本であることを示した。又その下「凡幾章」と註したのは清家本の分章に従つたので、清家本の分章が不自然だと考へたところは「舊幾章、今改分幾章」と註して責任を明かにしておいた。

六、譯文には註をさけたが、やむを得ない場合は月形括弧（）の中に簡単な説明を試みた。

七、經文だけで意味の諒解しがたいところは、大體古註に基いて補足を敢てした。補足の部分は龜形括弧「」で圍んで本文との混同をさけるやうにした。

## 論語卷第一



## 論語序

敘曰、漢中壘校尉劉向言、魯論語二十篇、皆孔子弟子記諸善言也、太子太傅夏侯勝・前將軍蕭望之・丞相韋賢・及子玄成等傳之、齊論語二十二篇、其二十篇中章句、頗多於魯論、瑯琊王卿及膠東庸生・昌邑中尉王吉・皆以教之、故有魯論、有齊論、魯恭王時、嘗欲以孔子宅爲宮、壞得古文論語、齊論有問王知道、多於魯論二篇、古論亦無此二篇、分堯曰下章子張問以爲一篇、有兩子張、凡二十一篇、篇次不與齊魯論同、安昌侯張禹本受魯論、兼講齊說善從之、號曰張侯論、爲世所貴、苞氏周氏章句出焉、古論唯博士孔安國爲之訓說、而世不傳、至順帝時、南郡太守馬融亦爲之訓說、漢末太司農鄭玄、就魯論篇章、考之齊古、以爲之註、近故司空陳羣太常王肅博士周生烈皆爲義說、前世傳受師說、雖有異同、不爲訓解、中間爲之訓解、

○唐石經二十廿に作る、下同

○唐石經太下に作る、下同

○唐石經瑯琊琅邪に作る、

○唐石經教之教授に作る、

○恭王邢本共王に作る、唐石經此所剝蝕、

○唐石經善下者の字あり、

○唐石經苞に作る、

○唐石經說解に作る、

○唐石經以の字なし、

## 論語序

敘して曰ふ、漢の中壘校尉劉向言く、魯論語は二十篇、皆孔子の弟子諸の善言を記せるなり、太子太傅夏侯勝・前將軍蕭望之・丞相韋賢・及び子玄成等之を傳ふ。齊論語は二十二篇、其二十篇中の章句、頗魯論より多し、琅邪の王卿・及び膠東の庸生・昌邑の中尉王吉皆以て之を教ふ。故に魯論あり齊論あり。魯の恭王（共王）の時、嘗て孔子の宅を以て宮と爲さむと欲し、壞てるとき、古文論語を得たり、齊論には問王〔篇〕知道〔篇〕ありて魯論より多きこと二篇、古論にも亦此二篇なく、堯曰〔篇〕の下章子張問を分つて以て一篇となし兩の子張〔篇〕ありて凡て二十一篇、篇の次（順序）齊魯論と同じからず。安昌侯張禹本魯論を受け兼て齊說を講じ、善きものは之に従ひ、號けて張侯論といひ、世の貴ぶところとなる、苞氏（包咸）周氏の章句出づ。古論はたゞ博士孔安國これが訓說を爲れるも世に傳へず、〔後漢〕順帝の時に至つて、南郡の大守馬融亦これが訓說を爲れり。〔後〕漢の末、大司農鄭玄魯論の篇章につき、之を齊〔論〕古〔論〕



至于今多矣、所見不同、互有得失、今集諸家之善説、記其姓名、有不安者、頗爲改易、名曰論語集解、光祿大夫關内侯臣孫邕・光祿大夫臣鄭冲・散騎常侍中領軍安卿亭侯臣曹羲・侍中臣荀顛・尙書駙馬都尉關内侯臣何晏等上、

○宋本説の字なし、唐石經このところ剝蝕、其字數によつて考ふるに亦説の字なきに似たり、  
○唐石經冲沖に作る、

に考へて、これが註を爲る。近ごろ故の司空陳群・大常王肅・博士周生烈皆義説を爲れり。前世(前漢)には師説を傳受して異同ありと雖も訓解を爲らず、中間(後漢)これが訓解を作り、今(魏)に至つて多し。見るところ同じからずして互に得失あり。今諸家の善を集めてその姓名を記し、安からざる者あれば、頗爲めに改め易へ、名けて論語集解といふ。光祿大夫關内侯臣孫邕・光祿大夫臣鄭冲・散騎常侍中領軍安卿亭侯臣曹羲・侍中臣荀顛・尙書駙馬都尉關内侯臣何晏等上つる。



論語學而第一 何晏集解 凡十六章

○唐石經篇題の上論語の二字なく、何晏集解の下章數なし、下同じ、

一、子曰、學而時習之、不亦悅乎、有朋自遠方來、不亦樂乎、人不知而不愠、不亦君子乎、

○悅、唐石經說に作る、釋文云、說音悅、

二、有子曰、其爲人也孝悌而好犯上者、鮮矣、不好犯上而好作亂者、未之有也、君子務本、本立而道生、孝悌也者、其仁之本與、

○有朋、釋文云、一本友朋に作る、有恐らくは友の字の假借、

三、子曰、巧言令色、鮮矣仁、

○孝悌、唐石經孝弟に作る、釋文云、第一本或悌に作る、此本一本と同じ、

四、曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而信乎、傳不習乎、

○唐石經其下爲の字あり、

五、子曰、導千乘之國、敬事而信、節用而愛人、使民以時、

六、子曰、弟子入則孝、出則悌、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文、

○導、唐石經道に作る、釋文云、道一本或導に作る、此本一本と同じ、

○悌、唐石經弟に作る、

論語學而第一 凡十六章

一、子曰く、學びて時に習ふ、亦よろこば說(悅)しからずや。有朋(友朋)遠方より來る、亦樂たのしからずや。人(己を)知らざるも愠うらみず、亦君子ならずや。

二、有子曰く、その人と爲り、孝弟(悌)にして上を犯すことを好むものは鮮すくなし。上を犯すことを好まずして亂を作なすことを好むものは、未だこれ有らざるなり。君子は本を務む、本立ちて道な生る、孝弟はそれ仁の本か。

三、子曰く、言ことを巧よくし色よくを令する(人)は、鮮すくなし、仁あること。

四、曾子曰く、吾日に三たび吾身かへりみを省る、人のために謀はかりて忠ならざるか、朋友と交りて信あらざるか、習はざるを傳ふるかと。

五、子曰く、千乘の國を導をさ(治)むるには、事を敬つとんで信まことあり、用を節して人を愛し、民を使ふに時を以てせよ。

六、子曰く、弟子入りては則ち孝、出でては則ち弟(悌)、謹みて信まことあり、汎ひろく衆を愛して



七、子夏曰、賢賢易色、事父母能竭其力、事君能致其身、與朋友交、言而有信、雖曰未學、吾必謂之學矣、

八、子曰、君子不重則不威、學則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改、

○無友、釋文毋友に作り一本亦無友に作るといふ、此本唐石經皆一本に同じ、

九、曾子曰、慎終追遠、民德歸厚矣、

一〇、子禽問於子貢曰、夫子至於是邦也、必聞其政、求之與、抑與之與、

子貢曰、夫子溫良恭儉讓以得之、夫子之求也、其諸異乎人求之與、

○求下人唐石經之の字あり、

一一、子曰、父在觀其志、父沒觀其行、三年無改於父之道、可謂孝矣、

一二、有子曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也、

○漢石經可の字なし、

仁に親しみ、行餘力あれば則ち以て文を學べ。

七、子夏曰く、賢を賢（尊）び、色を易（輕易）り、父母に事へて能く其力を竭し、君に事へて能く其身を致げ、朋友と交り言ひて信あらば、未だ學ばずといふと雖も、吾は必ず之を學びたりと謂はむ。

八、子曰く、君子重からざれば即ち威あらず、學べば則ち固ならず。忠信〔の人〕に主み、己に如かざる者を友とすることなけれ、過てば則ち改むるに憚ることなけれ。

九、曾子曰く、終を慎しみ遠を追へば、民の徳厚に歸せむ。

一〇、子禽子貢に問ひて曰く、夫子のこの邦に至るや必ずその政を聞けり、〔夫子〕之を求めたるか、抑（或）〔人君〕之を與へたるか。子貢曰く、夫子は溫良恭儉讓もて之を得たり、夫子の求むるは其諸人の求むるに異なるか。

一一、子曰く、父在すときは其志を觀、父沒するときは其行を觀よ。三年父の道を改むるなき、孝といふべし。

一二、有子曰く、禮の用は和を貴しと爲す、先王の道もこれ（和）を美となす。〔然れども〕小大〔の事〕之に由るも行はれざる所あるは、和〔の貴き〕を知つて和せむとするも、禮を以て之を節せざれば亦行ふべからざればなり。



一三、有子曰、信近於義、言可復也、恭近於禮、遠恥辱也、因不失其親、亦可宗也、

○復とはいへることをふみ行ふ意、

一四、子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事而慎於言、就有道而正焉、可謂好學也已矣、

○道の字唐石經行旁にあり、蓋し後人の加ふる所、史記弟子傳此文を引く道の字あり、此本と同じ、

一五、子貢曰、貧而無詔、富而無驕、何如、子曰、可也、未若貧而樂道、富而好禮者也、子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與、子曰、賜也始可與言詩已矣、告諸往而知來者也、

○切磋琢磨とは骨象玉石を磨くこと、轉じて學問修養により人品を向上せしむる意、

一六、子曰、不患人之不己知、患己不知人也、

○末一句釋文患不知也に作り、且つ一本或患己不知人也に作るといふ、此本一本に同じ、唐石經己の字なく人の字あり、里仁十三、衛靈公十八參看、

論語爲政第二

何晏集解 凡二十四章

一、子曰、爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之、

○共は向と同音假借、めぐるとよむ、

一三、有子曰く、信義に近きときは、言復むべきなり。恭禮に近きときは恥辱に遠ざかるべきなり、困むところ其親を失はざるときは亦宗ぶべきなり。

一四、子曰く、君子は食飽むことを求むるなく、居安からむことを求むるなく、事に敏くして言を慎み、有道に就いて正す、學を好むといふべきなり。

一五、子貢曰く、貧くして詔ふことなく富みて驕ることなきは何如。子曰く、可なり、「然れども」未だ貧しくして道を樂しみ、富みて禮を好むものには若かざるなり。子貢曰く、詩に「切するが如く、磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し」といへるは、それこの謂か。子曰く、賜や始めて與に詩をいふべきなり、これに往にしことをつぐれば來らむことを知るものなり。

一六、子曰く、人の己を知らざるを患へず、人を知らざるを患へよ。

論語爲政第二

凡二十四章

一、子曰く、政を爲すに徳を以てすれば、譬へば北辰のその所に居て、衆星之を共るが如



二、子曰、詩三百、一言以蔽之、曰思無邪、  
三、子曰、導之以政、齊之以刑、民免而無恥、導之以德、齊之以禮、有恥且格、

○蔽は斷也、決なり、さだむとよむ、決定する意、  
○導、唐石經道に作る、

四、子曰、吾十有五而志乎學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而縱心所欲不踰矩、

○乎、唐石經于に作り、漢石經乎に作る、此本漢石經に同じ、

五、孟懿子問孝、子曰、無違、樊遲御、子告之曰、孟孫問孝於我、我對曰、無違、樊遲曰、何謂也、子曰、生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮、

○三十唐石經卅に作る、  
○縱、唐石經從に作る、

六、孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂、

七、子游問孝、子曰、今之孝者、是謂能養、至於犬馬、皆能有養、不敬何以別、

○唐石經別下乎字あり、漢石經なし、此本と同じ、

八、子夏問孝、子曰、色難、有事弟子服其勞、有酒食先生饌、曾是以爲孝乎、

し。

二、子曰く、詩三百、一言以て之を蔽むれば、「思ひ邪なし」といふべし。

三、子曰く、之を導くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥なし。之を導くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすれば、恥ありて且つ格し。

四、子曰く、吾十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ、七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず。

五、孟懿子孝を問ふ、子曰く違ふなかれ。樊遲御たりしとき子之に告げて曰く、孟孫孝を我に問ひしかば、我對へて違ふなかれといへり。樊遲曰く何の謂ぞや。子曰く〔父母〕生けるときは事ふるに禮を以てし、死せるときは葬るに禮を以てし、祭るに禮を以てすべし〔との謂なり〕。

六、孟武伯孝を問ふ。子曰く、父母〔のためには〕唯其疾あらむことをこれ憂へよ。

七、子游孝を問ふ。子曰く、今の孝は是〔祇〕能く養ふを謂ふ、〔然れども〕犬馬に至るまで皆能く養ふあり、敬せざれば何を以てか別たむ。

八、子夏孝を問ふ。子曰く色〔を和けて事へまつること〕難し。事あれば弟子其勞に服し、酒食あれば先生に饌ふるは〔是れ師弟の道のみ〕、曾是以て孝と爲さむや。



九、子曰、吾與回言終日、不違如愚、退而省其私、亦足以發、回也不愚、

一〇、子曰、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉、人焉廋哉、

一一、子曰、溫故而知新、可以爲師矣、

一二、子曰、君子不器、

一三、子貢問君子、子曰、先行、其言而後從之、

一四、子曰、君子周而不比、小人比而不周、

一五、子曰、學而不思則罔、思而不學則殆、

一六、子曰、攻乎異端、斯害也已矣、

一七、子曰、由誨汝知之乎、知之爲知之、不知爲不知、是知也、

一八、子張學干祿、子曰、多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤、多見闕殆、慎行其餘、則寡悔、言寡尤行寡悔、祿在其中矣、

○漢石經句末哉の字なし、此本唐石經にもあり、  
○溫は習熟の意、  
○不器とは一つの用に滞らざる意、

○殆は惑と同じ、

○汝、漢唐石經釋文皆女に作る、

○史記仲尼弟子列傳此章を引く、學を問に作る、學の字古問と同義、

○殆は疑と同義、

九、子曰く、吾回と言ふ終日なりしに、違まざることを愚なるが如し。〔吾〕退いて其私〔居する様〕を省るに亦以て發かにするに足れり、回は愚ならず。

一〇、子曰く、其以（爲）す所を視、其由（經）る所を觀、其安んずる所を察るときは、人焉ぞ廋さむや、人焉ぞ廋さむや。

一一、子曰く、故を溫めて新を知る、以て師と爲すべし。

一二、子曰く、君子は器ならず。

一三、子貢君子を問ふ。子曰く、先づ行ふ、其言は而して後之に従ふ。

一四、子曰く、君子は周みて比らず、小人は比りて周まず。

一五、子曰く、學びて思はざれば則ち罔く、思ひて學ばざれば則ち殆ふ。

一六、子曰く、異端を攻むるは斯ち害あるのみ。

一七、子曰く、由よ汝に知ることを誨へむか、知れるを知るとなし、知らざるを知らずとせよ、是れ知るなり。

一八、子張祿を干むる〔道〕を學ぶ。子曰く、多く聞きて疑しきを闕き、慎みてその餘を言へば尤寡く、多く見て殆しきを闕き、慎みてその餘を行へば悔寡し、言尤寡く、行悔寡ければ祿はその中にあり。



一九、哀公問曰、何爲則民服、孔子對曰、舉直錯諸枉、則民服、舉枉錯諸直、則民不服、

○釋文、錯鄭本措に作る、措は置也、顏淵篇第二十二章參照、

二〇、季康子問、使民敬忠以勸、如之何、子曰、臨之以莊則敬、孝慈則忠、舉善而教不能則同勸、

○唐石經民字なし、此本民の字恐らくは衍、

二一、或謂孔子曰、子奚不爲政、子曰、書云、孝于惟孝、友于兄弟、施於有政、是亦爲政也、奚其爲爲政也、

○釋文孝于一本孝乎に作る、唐石經孝乎一本に同じ、漢石經孝于此本と合す、

二二、子曰、人而無信、不知其可也、大車無輓、小車爲軌、其何以行之哉、

○於、後漢鄧傳引之に作る、於之同義、これとよむ、

二三、子張問、十世可知也、子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因於殷禮、所損益可知也、其或繼周者、雖百世可知、

○釋文、也一本乎に作る、其或の或は助辭、二字にてそれとよむ、

二四、子曰、非其鬼而祭之、詔也、見義不爲、無勇、

○唐石經章末也の字あり、唐石經宋本章末也の字あり、正和本嘉曆本なし、縮臨本也の字ある宋本によつて補ふところ、

一九、哀公問ひて曰く、何爲ば則ち民服せむ。孔子對へて曰く、直き「人」を擧げて、これを枉れる「人の上」に錯けば則ち民服せむ。枉れる「人」を擧げて、これを直き「人の上」に錯けば則ち民服せじ。

二〇、季康子問ふ、民をして敬忠ありて勸しめむには如何にすべき。子曰く、之に臨むに莊を以てすれば則ち敬あらむ、孝慈ならば則ち忠あらむ、善きを擧げて不能を教ふれば則ち勸めむ。

二一、或人孔子に謂りて曰く、子奚ぞ政を爲さる、子曰く、書に「孝なるかなこれ孝、兄弟に友あれ」と云へり、於（之）を施（行）ひて政（正）すあれば是れ亦政を爲すなり、奚ぞそれ政を爲すことをなさむや。

二二、子曰く、人にして信なければ、その可なるを知らざるなり、大車輓なく、小車軌なくんばそれ何を以てか之を行らむや。

二三、子張問ふ、十世知るべきか。子曰く、殷は夏の禮に因る、損益するところ知るべきなり。周は殷の禮に因る、損益するところ知るべきなり。其或周に繼がむものは、百世といへども知るべきなり。

二四、子曰く、其鬼に非ずして祭るは詔ふなり、義を見て爲ざるは勇なきなり。



論語卷第二

論語八則三

一、子曰：「君子食無求飽，居無求安，敏於事而慎於言，就有道而正焉，可謂好学也已。」

二、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

三、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

四、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

五、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

六、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

七、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

八、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

九、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」

十、子曰：「君子欲讒人惡，必先惡其身。」



論語八佾第三 何晏集解 凡二十六章

- 一、孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也、
- 二、三家者以雍徹、子曰、相維辟公、天子穆穆、奚取三家之堂、
- 三、子曰、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何、
- 四、林放問禮之本、子曰、大哉問、禮與其奢也寧儉、喪與其易也寧戚、
- 五、子曰、夷狄之有君、不如諸夏之亡也、
- 六、季氏旅於泰山、子謂冉有曰、汝不能救與、對曰、不能、子曰、嗚呼、會謂泰山不如林放乎、

○釋文、撤一本徹に作る、此本一本に同じ、  
 ○辟公は諸侯、  
 ○取下三上、唐石經於の字あり、  
 ○旅は祿の假借、山祭也、  
 ○不宋本弗に作る、唐石經磨滅、  
 ○釋文、嗚乎一本烏乎に作る、

論語八佾第三 凡二十六章

- 一、孔子季氏を謂る、〔天子宗廟を祭る、八佾の舞あり、季氏も亦〕八佾して庭に舞はしむ。是をしも忍ぶべくんば、孰をか忍ぶべからざらむ。
- 二、〔天子宗廟を祭る、雍を歌うてその俎を撤す、今〕三家雍を以て撤せり、子曰く〔雍の詩にいふ〕「相くるは維れ辟公、天子穆穆たり」と、「この意」奚ぞ三家の堂に取らむ。
- 三、子曰く、人にして仁あらずんば、禮を如何せむ。人にして仁あらずんば、樂を如何せむ。
- 四、林放禮の本を問ふ、子曰く大なるかな問へること、禮はその奢らむよりは寧ろ儉なれ、喪はその易ならむよりは寧ろ戚しくせよ。
- 五、子曰く、夷狄の君あるは、諸夏の亡きにも如かざるなり。
- 六、季氏泰山に旅す。子、冉有に謂つて曰く、汝救（止）る能はざるか。對へて曰く、能はず。子曰く、嗚呼〔然らば〕會泰山を林放にすら如かずと謂へるか。



七、子曰、君子無所爭、必也射乎、揖讓而升下、而飲、其爭也君子、

八、子夏問曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也、子曰、繪事

後素、曰禮後乎、子曰、起予者、商也始可與言詩已矣、

九、子曰、夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮吾能言之、宋不足徵也、

文獻不足故也、足則吾能徵之矣、

一〇、子曰、禘自既灌而往者、吾不欲觀之矣、

一一、或問禘之說、子曰、不知也、知其說者之於天下也、其如示諸斯乎、

指其掌、

一二、祭如在、祭神如神在、子曰、吾不與祭、如不祭、

一三、王孫賈問曰、與其媚於奧、寧媚於竈、何謂、子曰、不然、獲罪於天、

無所禱也、

○唐石經謂下也の字あり、

○盼は盼の誤、釋文盼に作る、  
○釋文、繪一本績に作る、  
○者、漢石經なし、

○文獻とは文章と賢才、即ち  
記録と學者の意、

二

一二、祭るに在すが如くし、神を祭るに神在すが如くす。子曰く、吾祭に與らざれば、祭らざるが如くす。

一三、王孫賈問ひて曰く、その奥に媚びむよりは寧ろ竈に媚びよとは何の謂ぞや。子曰く、

七、子曰く、君子は争ふところなし、「若しあらば」必ず射るとき乎、揖讓して升下し、而

して「勝てるもの勝たざるものをして」飲ましむ、その争は君子なり。

八、子夏問ひて曰く、「詩に」「巧笑倩たり、美目盼たり、素ありて以て絢をなす」と「い

へる」は何の謂ぞや。子曰く、繪事（繪繡を施す）は素（素絹の功）に後る。「子夏」

曰く、「忠信を先とすべくして」禮は後なるか。子曰く、予「が意」を起れり、商や始

めてともに詩を言ふべし。

九、子曰く、夏禮は吾能く之を言かむとせるも、杞徵するに足らざるなり、殷禮も吾能く

之を言かむとせるも、宋徵するに足らざるなり、文と獻（賢）と足らざるが故なり、

足らば則ち吾能く之を徵せむ。

一〇、子曰く、禘既に灌してより往は、吾之を觀るを欲せざるなり。

一一、或る人禘の說を問ふ。子曰く、知らず、其說を知るものの天下「の事」に於けるや、

それこれを斯に示（視）るが如きかとして、其掌を指せり。

一二、祭るに在すが如くし、神を祭るに神在すが如くす。子曰く、吾祭に與らざれば、祭ら



一四、子曰、周監於二代、郁郁乎文哉、吾從周、

一五、子入太廟、每事問、或曰、孰謂鄫人之子知禮乎、入太廟、每事問、

子聞之曰、是禮也、

○太、唐石經大に作る、

一六、子曰、射不主皮、爲力不同科、古之道也、

一七、子貢欲去告朔之餼羊、子曰、賜也、汝愛其羊我愛其禮、

○汝、唐石經女に作る、

一八、子曰、事君盡禮、人以爲詔、

○唐石經句末也の字あり、

一九、定公問、君使臣、臣事君、如之何、孔子對曰、君使臣以禮、臣事君以忠、

二〇、子曰、關雎樂而不淫、哀而不傷、

二一、哀公問社於宰我、宰我對曰、夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗、

○釋文、社鄭本主に作る、

曰使民戰栗也、子聞之曰、成事不說、遂事不諫、既往不咎、

然らず、罪を天に獲るものは禱る所なきなり。

一四、子曰く、周は二代に監み郁郁乎として文なるかな、吾は周に従はむ。

一五、子大廟に入り事ごとに問ふ。或人曰く、孰か鄫人の子を禮を知れりといふか、大廟に入りて事ごとに問へり。子之を聞いて曰く、是れ禮なり。

一六、子曰く、射に皮を主とせざるは、力科を同じくせざるが爲めなり、「これ」古の道なり。

一七、子貢告朔の餼羊を去らむと欲す。子曰く、賜よ、汝はその羊を愛むも、我はその禮を愛む。

一八、子曰く、君に事へて禮を盡せば、人以て詔らふと爲す。

一九、定公問ふ、君、臣を使ひ、臣、君に事ふるには如何にすべき。孔子對へて曰く、君は臣を使ふに禮を以てし、臣は君に事ふるに忠を以てせよ。

二〇、子曰く、關雎は樂しむも淫せず、哀しむも傷らず。

二一、「哀公四年亳の社災く」、哀公「之を修めむと欲して」社「の樹」を宰我に問ふ。宰我對へて曰く、夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす、曰く、「周人の栗を以てせるは」民をして戰栗せしめむとてなりと。「古は命を用ゐざるもの、これを社に戮す、宰我の意、蓋し社を修めて三桓を戮すべきを諷するなり」。孔子之を聞



二二、子曰、管仲之器小哉、或曰、管仲儉乎、曰、管氏有三歸、官事不攝、焉得儉乎。曰、然則管仲知禮乎、曰、邦君樹塞門、管氏亦樹塞門、邦君爲兩君之好有反玷、管氏亦有反玷、管氏而知禮、孰不知禮、

二三、子語魯大師樂曰、樂其可知已、始作翕如也、從之純如也、敝如也、繹如也以成、

二四、儀封人請見、曰、君子之至於斯者、吾未嘗不得見也、從者見之、出曰、二三子何患於喪乎、天下之無道久矣、天將以夫子爲木鐸、

二五、子謂韶、盡美矣、又盡善也、謂武、盡美矣、未盡善也、

二六、子曰、居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉、

○三歸は三區の邸宅をいふ、一説には三百乗の誤といふ、

○官事不攝とは官ごとに専任の役人をおくなり、

○唐石經乎曰の二字なし、

○玷、釋文及唐石經玷に作る、此本玷に作るは誤、

○大師は樂官の名、

○已、唐石經也に作る、

○史記孔子世家四の也字なく、從を縦に作る、

○儀は衛の西境にあり、封人は封疆を守る役人、

○者、唐石經也に作る、

○漢唐石經道下也字あり、

○木鐸は木舌の鐸、政教を施す時に鳴らす、

○韶は舜の樂、武は武王の樂、

きて「宰我の輕躁を戒めて」曰く、成せし事は説(脱)るべからず、遂げし事は諫むべからず、既往は咎むべからず。「たゞ將にその後を慎むべし」。

二二、子曰く、管仲の器小なるかな。或人曰く、管仲は儉なるか。曰く、管氏三歸あり、官事攝す、焉んぞ儉なるを得む。曰く、然らば則ち管仲は禮を知れるか。曰く、邦君は樹(屏)もて門を塞ふ、管氏も亦樹(屏)もて門を塞へり、邦君兩君の好を爲すに反玷あり、管氏も亦反玷あり、管氏而禮を知らば、孰か禮を知らざらむ。

二三、子、魯の大師に樂を語つて曰く、樂はそれ知るべきなり、始めて作す翕如たり、之を縦つ純如たり、敝如たり、繹如たり、以て成る。

二四、「孔子儀邑を過ぐ」、儀の封人見えむことを請ひて曰く、君子の斯に至れるもの、吾嘗て見ゆるを得ざりしことなし、「請ふまた夫子に見えむ」と。從者之を見えしむ。出るとき「從者に告げて」曰く二三子何ぞ「夫子の位」喪きを患へむ、「今」天下道なきこと久し、「然れども」天は將に夫子を以て木鐸と爲さむとすと。

二五、子韶を謂る、美を盡し又善を盡せりと、武を謂る、美を盡せるも未だ善を盡さずと。

二六、子曰く、上に居て寬ならず、禮を爲して敬まず、喪に臨んで哀まずんば、吾何を以てか之を觀むや。



論語里仁第四 何晏集解 凡二十六章

一、子曰、里仁爲善、擇不處仁、焉得智、  
二、子曰、不仁者、不可以久處約、不可以長處樂、仁者安仁、知者利仁、

○唐石經善を美に作り、智を知に作る、孟子公孫丑上孔子の語を引く、石經と同じ、

三、子曰、唯仁者能好人、能惡人、

四、子曰、苟志於仁矣、無惡也、

五、子曰、富與貴、是人之所欲也、不以其道、得之不處也、貧與賤、是人之所惡、不以其道、得之不去也、君子去仁、惡乎成名、君子無

○唐石經惡下也の字あり、

終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是、

○造次は倉卒の意、顛沛は急遽の意、

六、子曰、我未見好仁者惡不仁者、好仁者無以尙之、惡不仁者其爲仁矣、不使不仁者加乎其身、有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者、蓋有之乎、我未之見也、

○乎、唐石經突に作る、

論語里仁第四 凡二十六章

一、子曰く、仁に里るを美となす、擇びて仁に處らず、焉ぞ知たるを得む。

二、子曰く、不仁者は以て久しく約に處るべからず、以て長く樂に處るべからず。仁者は仁に安んじ、知者仁を利とす。

三、子曰く、唯仁者能く人を好し、能く人を惡む。

四、子曰く、苟に仁に志さば惡きことなし。

五、子曰く、富と貴きとは、これ人の欲するところなり、その道を以てせざればこれを得るも處らざるなり。貧きと賤きとは、これ人の惡むところなり、その道を以てせざれば、これを得るも去らざるなり。君子仁を去りて惡にか名を成さむ、君子は終食ふ間も仁を違ることなく、造次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是に於てす。

六、子曰く、我未だ仁を好するもの不仁を惡むものを見ず。仁を好するものは以て尙ふるなし。不仁を惡むものは其(乃)仁たり、不仁者をして其身に加へしめず。能く一日



七、子曰、民之過也、各於其黨、觀過斯知仁矣、  
八、子曰、朝聞道、夕死可矣、

九、子曰、士志於道、而恥惡衣惡食者、未足與議也、

一〇、子曰、君子之於天下也、無適也無莫也、義之與比也、

一一、子曰、君子懷德、小人懷土、君子懷刑、小人懷惠、

一二、子曰、放於利而行、多怨、

一三、子曰、能以禮讓爲國乎、何有、不能以禮讓爲國、如禮何、

一四、子曰、不患無位、患所以立、不患莫己知也、求爲可知也、

一五、子曰、參乎、吾道一以貫之、曾子曰、唯、子曰、門人問曰、何謂

也、曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣、

一六、子曰、君子喻於義、小人喻於利、

○民、唐石經辟諱人を作る、

○君子は官吏、小人は人民をいふ、

○後漢書劉般傳、列女傳曹世叔妻の上疏此章を引く何有の上に於從政の三字あり、學而十六、衛靈公十八參照、

其力を仁に用ゐるあらむか、我未だ力の足らざるものを見ず、蓋しこれあらむも我未だこれを見ざるなり。

七、子曰く、民の過つや、各其黨(たぐひ)(類)に於てす。「故に」過を觀れば、斯すなはち仁を知るべし。

八、子曰く、朝に道を聞かば夕に死すとも可なり。

九、子曰く、士道に志して惡衣惡食を恥づるものは與ともに議はかるに足らざるなり。

一〇、子曰く、君子の天下に於けるや、適さから(敵)ふなく莫した(慕)ふなく、義をこれ比したしむ。

一一、子曰く、君子徳を懷おもへば小人土を懷ひ、君子刑を懷へば小人惠を懷ふ。

一二、子曰く、利に放よ(依)りて行へば怨多し。

一三、子曰く、能く禮讓を以て國を爲なめむか、「政に従ふに於いて」何かあらん。禮讓を以て

國を爲なむる能はずんば、禮を如何せん。

一四、子曰く、位なきを患へず、立つ所以を患へよ。己を知るなきを患へず、知らるべきを

爲さむことを求めよ。

一五、子曰く、參よ、吾が道は一以てこれを貫おこな(行)ふ。曾子曰く、唯。子出づ、門人「曾

子に」問ひて曰く、何の謂ぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。

一六、子曰く、君子は義よこに喻さとり、小人は利よこに喻さとる。



- 一七、子曰、見賢思齊焉、見不賢則內自省也、
- 一八、子曰、事父母幾諫、見志不從、又敬不違、勞不怨、
- 一九、子曰、父母在、不遠遊、遊必有方、
- 二〇、子曰、三年無改於父之道、可謂孝矣、
- 二一、子曰、父母之年、不可不知也、一則以喜、一則以懼、
- 二二、子曰、古者言之不出、恥躬之不逮也、
- 二三、子曰、以約失之者鮮矣、
- 二四、子曰、君子欲訥於言而敏於行、
- 二五、子曰、德不孤、必有鄰、
- 二六、子游曰、事君數斯辱矣、朋友數斯疏矣、

○唐石經勞下而の字あり、

○數は責の借字、他人の罪を責問する意、

- 一七、子曰く、賢を見ては齊からむことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省みよ。
- 一八、子曰く、父母に事へては幾に諫め、志の従はれざるを見ては又敬んで違はず、勞(憂)へて怨みざれ。
- 一九、子曰く、父母在ますときは遠く遊ばず、遊ぶに必ず方(常所)あるべし。
- 二〇、子曰く、三年父の道を改むることなき、孝といふべし。
- 二一、子曰く、父母の年は知らざるべからず、一つは則ち以て喜び、一つは則ち以て懼る。
- 二二、子曰く、古の者の言を出さざるは、躬の逮ばざらむことを恥づればなり。
- 二三、子曰く、約(儉約)を以て失(過)つものは鮮し。
- 二四、子曰く、君子は言に訥して、行に敏からむことを欲す。
- 二五、子曰く、徳孤ならず、必ず鄰あり。
- 二六、子游曰く、君に事へて數(責)むれば斯(則)ち辱められ、朋友に「交りて」數(責)むれば斯(則)ち疏ぜらる。



論語卷第三



論語公冶長第五 何晏集解 凡二十九章

- 一、子謂公冶長、可妻也、雖在縲紲之中、非其罪也、以其子妻之、
- 二、子謂南容、邦有道不廢、邦無道免於刑戮、以其兄之子妻之、
- 三、子謂子賤、君子哉若人、魯無君子者、斯焉取斯、
- 四、子貢問曰、賜也如何、子曰、汝器也、曰、何器也、曰、瑚璉也、
- 五、或曰、雍也仁而不佞、子曰、焉用佞、禦人以給、屢憎民、不知其仁也、焉用佞、
- 六、子使漆彫開仕、對曰、吾斯之未能信、子說、

○繼唐本綫に作る、蓋唐人大宗の諱を避けて改むるところ、

○如何唐石經何如に作る、

○汝唐石經女に作る、

○瑚璉は宗廟の祭器、

○唐石經給を「口給」に作り、民を「於人」に作り、其仁を「其人」に作り、三也字なし、

論語公冶長第五 凡二十九章

- 一、子公冶長を謂ふ、妻すべし、縲紲の中にありと雖も、その罪にあらずと、其子を以て之に妻す。
- 二、子南容を謂ふ、邦に道あるときは廢られず、邦に道なきときも刑戮に免るべしと、其兄の子を以て之に妻す。
- 三、子子賤を謂ふ、君子なるかな、若き人、魯に君子なかりせば、斯ちいづくにか斯を取らむと。
- 四、子貢問ひて曰く、賜は何如。子曰く、汝は器なり。曰く、何の器ぞや。曰く、瑚璉なり。
- 五、或ひと曰く、雍は仁あるも佞（口才）あらずと。子曰く、焉ぞ佞を用ゐん、人を禦ぎて給（口辭捷給）ときは、屢民に憎まる、其仁を知らざるなり、焉ぞ佞を用ゐむ。
- 六、子、漆彫開をして仕へしめむとす。對へて曰く、吾は斯（我の仕へ得べき）を未だ信ずる能はずと、子「その志道の深きを」説ぶ。



七、子曰、道不行、乘桴浮於海、從我者其由也。與、子路聞之喜、子曰、由也好勇過我、無所取材、

○於、唐石經于に作る、也與、唐石經也の字なし、漢書地理志顏注引也歟に作る、

八、孟武伯問、子路仁乎、子曰、不知也、又問、子曰、由也、千乘之國、可使治其賦也、不知其仁也、求也何如、子曰、求也、千室之邑、百乘之家、可使爲之宰也、不知其仁也、赤也何如、子曰、赤也、束帶立於朝、可使與賓客言也、不知其仁也、

九、子謂子貢曰、汝與回也孰愈、對曰、賜也、何敢望回、回也聞一以知十、賜也聞一以知二、子曰、弗如也、吾與汝弗如也、

○汝唐石經女に作り、釋文爾に作る、

一〇、宰予晝寢、子曰、朽木不可彫也、糞土之牆不可朽也、於予與何誅、子曰、始吾於人也、聽其言而信其行、今吾於人也、聽其言而觀其行、於予與改是、

○糞土之牆とは塵埃をつみて高くなれるところ、

一一、子曰、吾未見剛者、或對曰申枨、子曰、枨也慾、焉得剛、

七、子曰く、道行はれずんば桴いかだにのりて海に浮ばむ、我に從はむ者ひとはそれ由か。子路之を

聞きて喜ぶ。子曰く、由は勇を好むこと我に過ぎたり、「然れども」〔桴〕材を取るところなからむ。

八、孟武伯問ふ、子路仁なるか。子曰く、知らず。又問ふ。子曰く、由は千乗の國其賦を治めしむべし、其仁を知らざるなり。求は何如。子曰く、求は千室の邑、百乗の家、これが宰たらしむべし、其仁を知らざるなり。赤は何如。子曰く、赤は束帶して朝に立ち、賓客ものいと言はしむべし、其仁を知らざるなり。

九、子、子貢に謂つて曰く、汝回と孰いづれか愈まされる。對こたへて曰く、賜は何を敢て回を望まむ、回は一を聞いて以て十を知る、賜は一を聞いて以て二を知るのみ。子曰く、如かざるなり、吾も汝とともに如かざるなり。

一〇、宰予晝寢ぬ。子曰く朽ちたる木は彫るべからず、糞土の牆は朽なだらすべからず、「宰」予に於いて何を誅せめむ。子曰く、始め吾、人に於けるや、其言を聽きて其行を信ぜり、今吾、人に於けるや、其言を聽きて其行を觀る、「宰」予に於いて是を改めたり。

一一、子曰く、吾未だ剛なる者ひとを見ず。或ひと曰く申枨あり。子曰く枨は慾あり焉ぞ剛なるを得む。



一二、子貢曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、子曰、賜也非爾所及也、

一三、子貢曰、夫子之文章可得而聞也、夫子之言性與天道、不可得而聞也、已矣、

一四、子路有聞、未能行、唯恐有聞、

一五、子貢問曰、孔文子何以謂之文也、子曰、敏而好學、不恥下問、是以謂之文也、

一六、子謂子產、有君子之道四焉、其行己也恭、其事上也敬、其養民也惠、其使民義、

一七、子曰、晏平仲善與人交、久而人敬之、

一八、子曰、臧文仲居蔡、山節藻梲、何如其知也、

一九、子張問曰、令尹子文三仕爲令尹、無喜色、三已之、無愠色、舊令尹之政、必以告新令尹、何如、子曰、忠矣、曰、仁矣乎、曰、未知、焉得仁、

○文章は詩と書、  
○唐石經已矣の二字なし、史記世家引、也已に作り、漢書陸宏傳引已矣に作り、外戚傳注引也已矣に作る、  
○未下唐石經之の字あり、

○唐石經民下義上也の字あり、此本これを脱す、  
○唐石經人の字なし、疏文による皇侃本又人字あり此本と同じ、

一二、子貢曰く、我人のこれを我に加ふるを欲せざることは、吾も亦これを人に加ふるなからむことを欲す。子曰く、賜よ、爾の及ぶところに非ざるなり。

一三、子貢曰く、夫子の文章は得て聞くべし、夫子の性と天道とを言へるは得て聞くべからざるなり。

一四、子路聞けることありて、未だ行ふ能はざるときは、唯聞くあらむことを恐る。

一五、子貢問ひて曰く、孔文子は何を以て之を文と謂ふか。子曰く敏にして學を好み下問を恥ぢず、是を以て之を文と謂ふなり。

一六、子、子産を謂ふ、君子の道四つあり、その己を行ふや恭、その上に事ふるや敬、その民を養ふや惠、その民を使ふや義。

一七、子曰く、晏平仲善く人と交り、久くして人これを敬ふ。

一八、子曰く、臧文仲蔡(ト龜)を居ふ〔これ國君の禮、また〕節(枅形)に山(を)えり、梲(梁上の短柱)に藻(を)えがく、〔これ天子の廟飾、臧文仲皆之を僭す〕、何如ぞそれ知らむ。

知ならむ。

一九、子張問ひて曰く、令尹子文三たび仕へて令尹となれるも喜べる色なく、三たび已めらるゝも愠める色なく、舊き令尹の政は必ず以て新しき令尹に告げたり、何如。子曰く、



二〇、崔子弑齊君、陳文子有馬十乘、棄而違之、至於他邦、則曰、猶

○棄、唐石經弁に作る、

吾大夫崔子也、違之、至一邦、則又曰、猶吾大夫崔子也、違之、何

○至、唐石經之に作る、

如、子曰、清矣、曰仁矣乎、曰未知、焉得仁、

二一、季文子三思而後行、子聞之曰、再圖斯可矣、

二二、子曰、甯武子、邦有道則知、邦無道則愚、其知可及也、其愚不可

及也、

二三、子在陳曰、歸與歸與、吾黨之小子狂簡、斐然成章、不知所以裁之

也、

二四、子曰、伯夷叔齊不念舊惡、怨是用希、

二五、子曰、孰謂微生高直、或乞醢焉、乞諸其鄰而與之、

二六、子曰、巧言令色足恭、左丘明恥之、丘亦恥之、匿怨而友其人、左

○足は容貌の意、

丘明恥之、丘亦恥之、

忠なり。曰く仁なりや。曰く、未だ知らず、焉ぞ仁なるを得む。

二〇、崔子、齊君を弑す、陳文子馬十乘あり、棄てて之を違る。他邦に至りて則ち曰く、猶吾大夫崔子のごとしと、之を違る。一邦に至りて則ち又曰く、猶吾大夫崔子のごとしと、之を違る。何如。子曰く清なり。曰く仁なりや。曰く、未だ知らず、焉ぞ仁なるを得む。

二一、季文子三たび思うて後行ふ。子之を聞いて曰く、再たび思へば斯すなはち可なり。

二二、子曰く、甯武子は邦に道あるときは即ち知あり、邦に道なきときは則ち愚なり、其知には及ぶべきも、其愚には及ぶべからざるなり。

二三、子、陳に在いまして曰く、歸らむか歸らむか、吾黨の小子狂簡なり、斐然として章を成せども之を裁する所以を知らず。

二四、子曰く、伯夷叔齊は舊惡を念はず、怨是こゝを用て希なり。

二五、子曰く、孰たれか微生高を以て直なりといふ、或ひと醢す(醋)を乞へるとき、これを其鄰に乞ひて之に與へたり、「その意を用ふる、委曲こまやかにして直にあらざるに似たり」。

二六、子曰く、言を巧よくし色を令よくして足かたち(容貌) 恭しきは左丘明之を恥づ、丘も亦之を恥づ、怨を匿くして其人を友とするは、左丘明之を恥づ、丘も亦之を恥づ。



二七、顔淵季路侍、子曰、盍各言爾志、子路曰、願車馬衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾、顔淵曰、願無伐善、無施勞、子路曰、願聞子之志、

○輕の字唐石經行旁にあり、後人の加へし所、原刻輕字なきよし、

子曰、老者安之、朋友信之、少者懷之、

二八、子曰、已矣乎、吾未見能見其過而內自訟者也、

二九、子曰、十室之邑、必有忠信如丘者焉、不如丘之好學圉也、

論語雍也第六

何晏集解 凡三十章

一、子曰、雍也可使南面、

○可使南面とは卿大夫となりて政せしむべきをいふ、

二、仲弓問子桑伯子、子曰、可也、簡、仲弓曰、居敬而行簡、以臨其民、

不亦可乎、居簡而行簡、無乃太簡乎、子曰、雍之言然、

○太、唐石經大に作る、

二七、顔淵季路侍る。子曰く、なんぞ各爾の志を言はざる。子路曰く、願くは〔己の〕車馬

衣裘を、朋友とともにして之を敝やぶるも憾なみなからむ。顔淵曰く、願くは善ほにことなくこ勞を施すことなからむ。子路曰く、願くは子の志を聞かむ。子曰く、老者には安んぜられ、朋友には信ぜられ、少者には懷なつかまれむ。

二八、子曰く、已やぬるかな、吾未だ能く其過を見て内に自ら訟せむるものを見ざるなり。

二九、子曰く、十室の邑にも、必ず忠信丘の如きものはあらむ、〔然れども〕丘の好學には如かざるべし。

論語雍也第六

凡三十章

一、子曰く、雍は南面せしむべし。

二、仲弓子桑伯子を問ふ。子曰く、可なり簡なり。仲弓曰く、敬に居て簡を行ひ以て其民に臨まば、亦可ならずや、簡に居て簡を行ふは無む乃し大簡ならむか。子曰く、雍の言然よし。



三、哀公問曰、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顔回者、好學不遷怒、不貳過、不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也、

四、子華使於齊、冉子爲其母請粟、子曰、與之釜、請益、曰與之庾、冉子與之粟五秉、子曰、赤之適齊也、乘肥馬、衣輕裘、吾聞之也、君子周急不繼富、

五、原思爲之宰、與之粟九百、辭、子曰、毋、以與爾隣里鄉黨乎、

六、子謂仲弓曰、犁牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸、

七、子曰、回也其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣、

八、季康子問、仲由可使從政也與、子曰、由也果、於從政乎何有、曰、賜也可使從政也與、子曰、賜也達、於從政乎何有、曰、求也可使從政也與、子曰、求也藝、於從政乎何有、

○釋文、一本亡の字なし、下句に連ねてよむ、按ずるに亡の字先進第七章によつて加る所、刪るべし、

○犁牛は雜文の牛祭祀の用に當らず、騂は赤色、赤牛以て山川を祭る、仲弓の父賤しけれども其子の賢を害せざるに譬ふ、

三、哀公、問ふ、弟子孰か學を好むと爲す。孔子對へて曰く、顔回といふ者ありき、學を好み怒を遷さず過を貳たびせざりしが不幸短命にして死せり、今は則ち學を好むものを聞かざるなり。

四、子華、齊に使う。冉子其母の爲めに粟を〔與へむことを〕請ふ、子曰く、これに釜(六斗四升)を與へよ。〔冉子更に〕益さむことを請ふ、〔子〕曰く、之に庾(十六斗)を與へよ。冉子之に粟五秉(八十斛)を與ふ。子曰く、赤の齊に適くや、肥馬に乗り輕裘を衣たり、吾聞く君子は急を周ひて富めるを繼げずと。

五、〔子魯の司寇となりしとき〕原思之が宰と爲る、〔子〕之に粟九百〔斗〕を與ふ。〔原思〕辭す。子曰く〔辭すること〕毋れ、以て爾の鄰里鄉黨に與へむか。

六、子、仲弓を謂つて曰く、犁牛の子も騂く且つ角あらば、用ふる勿らむと欲すと雖も山川〔の神〕それこれを舍むや。

七、子曰く、回よ、其心三月仁を違らずんば、其餘〔の德〕は日月に至らむのみ。

八、季康子問ふ、仲由は政に従はしむべきか。子曰く、由は果なり、政に従ふに於て何かあらむ。曰く、賜は政に従はしむべきか。子曰く、賜は達なり、政に従ふに於て何かあらむ。曰く、求は政に従はしむべきか。子曰く、求は藝あり、政に従ふに於て何か



九、季氏使閔子騫爲費宰、閔子騫曰、善爲我辭焉、如有復我者、則吾必在汶上矣、

○釋文、一本吾の字なく、鄭本則吾の二字なし、史記弟子傳引鄭本と同じ、

一〇、伯牛有疾、子問之、自牖執其手、曰、亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也、斯人也而有斯疾也、

一一、子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也、

一二、冉有曰、非不説子之道也、力不足也、子曰、力不足者中道而廢、今女畫、

○有、唐石經求に作る、

一三、子謂子夏曰、爲君子儒、毋爲小人儒、

○唐石經曰の下女の字あり、毋無に作る、

一四、子游爲武城宰、子曰、汝得人焉耳乎、曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事、未嘗至於偃之室也、

○汝、唐石經女に作る、

一五、子曰、孟之反不伐、奔而殿、將入門、策其馬曰、非敢後也、馬不進也、

あらむ。

九、季氏、閔子騫をして費の宰たらしめむとす。閔子騫「その使者につげて」曰く、善く我がために辭せよ、もし我を復することあらば、則ち吾は必ず「去つて」汶「水」の上ほとにあらむ。

一〇、伯牛疾あり、子之を問ふ。牖より其手を執つて曰く、之を亡うしなはむ命なるかな、斯人にして斯疾ある、斯人にして斯疾ある。

一一、子曰く、賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷にあり。人は其憂に堪へざらむも回は其樂を改めず。賢なるかな回や。

一二、冉有曰く、子の道を説ばざるには非ざれども、力足らざるなり。子曰く、力足らざるものは中道にして廢む、今女は畫れり。

一三、子、子夏に謂て曰く、女君子の儒となれ、小人の儒となるなかれ。

一四、子游武城の宰となる。子曰く、汝人を得たるか。曰く澹臺滅明といふ者あり、行くに徑こみちに由らず、公事に非ざれば、未だ嘗て偃の室に至らざるなり。

一五、子曰く、孟之反は伐らず、嘗て齊師と戦ひ、軍敗れて「奔るとき殿しんがりし、將に「城」門に入らむとして其馬に策むちうちて曰ふ、敢て後れしにあらず、馬進まさりしなりと。



一六、子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣、

一七、子曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也、

一八、子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子、

一九、子曰、人之生也直、罔之生也、幸而免、

二〇、子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者、

二一、子曰、中人以上、可以語上也、中人以下、不可以語上也、

二二、樊遲問知、子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣、問仁、子曰、

仁者先難而後獲、可謂仁矣、

二三、子曰、智者樂水、仁者樂山、智者動、仁者靜、智者樂、仁者壽、

二四、子曰、齊一變至於魯、魯一變至於道、

二五、子曰、觚不觚、觚哉、觚哉、

○祝鮀は衛の才人、宋朝は衛の淫人、此の時祝鮀既に死してたゞ宋朝のみ存す、故にこの言あるなり、

○智、唐石經知に作る、

一六、子曰く、祝鮀の佞あらずして、宋朝の美あり。難いかな、今の世に免れむこと。

一七、子曰く、誰か能く出づるに戸に由らざらむ、何ぞ斯道に由る莫き。

一八、子曰く、質文に勝るときは則ち野、文質に勝るときは則ち史、文質彬彬りて然して後

君子なり。

一九、子曰く、人の生るは直ければなり、罔りて生くるは幸にして免れたるなり。

二〇、子曰く、知るものは好むものに如かず、好むものは樂しむものに如かず。

二一、子曰く、中人より以上には以て上を語るべく、中人より以下には以て上を語るべから

ず。

二二、樊遲知を問ふ。子曰く、民の義を務め、鬼神を敬して遠ざかる、知と謂ふべし。仁を

問ふ。子曰く、仁者は先づ難(勞苦)みて、後に「功を」獲、仁と謂ふべし。

二三、子曰く、知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。知者は動き、仁者は靜なり。知者は

樂しみ、仁者は壽ながし。

三 二四、子曰く、齊一變せば魯に至り、魯一變せば道に至らむ。

二五、子曰く、「古は燕禮酒を酌むに觚を用ゐるは、孤寡をよしとするなり、今飲酒度なくし

て、觚、觚(孤)ならず、觚ならむや、觚ならむや。



二六、宰我問曰、仁者雖告之曰井有仁圈焉、其從之也輿、子曰、何爲其然也、君子可逝也、不可陷也、可欺也、不可罔也、

二七、子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫、

二八、子見南子、子路不說、夫子矢之曰、子所否者、天厭之、天厭之、

二九、子曰、中庸之爲德也、其至矣乎、民鮮久矣、

三〇、子貢曰、如能博施於民而能濟衆、何如、可謂仁乎、子曰、何事於仁、必也聖乎、堯舜其猶病諸、夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬、可謂仁之方也已、

○宰我の間は孔子が陷阱に投ぜんことを恐れて諷する也、

○逝はよしと信じて進む、陷は悪と知りつゝ押し通す也、欺はいつはる也、罔は共謀して悪をなす也、  
○釋文、一本君子の二字なし、

○能、唐石經有に作る、

二六、宰我問ひて曰く、仁者は之に告ぐるに井に仁ありといふと雖も、それ之に従はむか。

子曰く、何すれぞそれ然かせむや、君子は逝かしむべし、陷らしむべからず、欺くべし、罔ふべからず。

二七、子曰く、君子博く文を學びて、之を約にするに禮を以てすれば、亦以て「道に」畔かざるべし。

二八、子、南子を見る、子路説ばず。夫子之に矢ひて曰く、予否ところあらば、天之を厭てむ、天之を厭てむと。

二九、子曰く、中庸の徳たるそれ至れるかな、民久しくする鮮し。

三〇、子貢曰く、もし能く博く民に施して能く衆を濟はば何如。仁と謂ふべきか。子曰く、何ぞ仁に事まらむ、必ずや聖か、堯舜もそれ猶これを病めり。それ仁者は己立たむと欲して人を立たしめ、己達せむと欲して人を達せしむ、能く近く譬（譬）を取る、仁の方といふべきなり。



三 卷 四  
一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、

論語卷第四

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、  
十一、  
十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、



論語述而第七 何晏集解 凡三十八章

- 一、子曰、述而不作、信而好古、竊比於我罔老彭、
- 二、子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉、
- 三、子曰、德之不脩、學之不講、聞義不能從、聞不能改、固不  
是吾憂也、
- 四、子之燕居、申申如也、夭夭如也、
- 五、子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公也、
- 六、子曰、志於道、據於德、依於仁、遊於藝、
- 七、子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉、
- 八、子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅而示之、不以三隅反、則固不  
復也、
- 九、子食於有喪者之側、未嘗飽也、子於是日也哭、則不歌、

○於字は衍文、老彭は殷の賢大夫、

○從、唐石經徒に作る、徒は改と韻をふむ、此本從に作るは誤なるべし、

○申申夭夭は和舒の貌、

○魏書崔光傳此章を引く、子曰の下に士の字あり、禮記少儀に「士依於德、游於藝」とあると同一句法、

○唐石經「而示之」の三字なし、文選西京賦注此章を引くこの三字あり、此本と同じ、

論語述而第七 凡三十八章

- 一、子曰く、述べて作らず、信じて古を好み、竊かに我を老彭に比す。
- 二、子曰く、黙して識り、學びて厭はず、人を誨へて倦まざること、我に於て何かあらむ。
- 三、子曰く、徳の脩まらざる、學の講ぜざる、義を聞きて徙る能はず、不善改むる能はざる、是れ吾憂なり。
- 四、子の燕居したまふときは、申申如たり、夭夭如たり。
- 五、子曰く、甚しいかな吾の衰へたる、久しいかな、吾復夢に周公を見ざること。
- 六、子曰く、「士は」道に志して徳に據り、仁に依りて藝に遊ぶ。
- 七、子曰く、束脩を行へるより以上のものは、吾未だ嘗て誨ふるなくんばあらず。
- 八、子曰く、憤えずんば啓へず、悱まずんば發さず、一隅を擧げて之に示して三隅を以て  
反みざれば復「教へ」ざるなり。
- 九、子、喪あるものの側に食するとき、未だ嘗て飽かず。子是日に於て哭すれば則ち歌



一〇、子謂顔淵曰、用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫、子路曰、子行三軍、則誰與、子曰、暴虎憑河、死而無悔者、吾不與也、必也臨事而懼好謀而成者也、

○憑、釋文唐石經馮に作る、

一一、子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之、如不可求罔從吾所好、

○釋文云、齊或は齋に作る、

一二、子之所慎、齊戰疾、

一三、子在齊、聞韶、聞三月、不知肉味、曰、不圖爲樂之至於斯也、

一四、冉有曰、夫子爲衛君乎、子貢曰、諾、吾將問之、入曰、伯夷叔齊何人也、罔曰、古之賢人也、曰怨乎、曰、求仁而得仁、又何怨、罔出曰、夫子不爲也、

一五、子曰、飯蔬食飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、

○蔬、唐石經疏に作る、

於我如浮雲、

はず。

一〇、子顔淵に謂つて曰く、用ゐらるれば則ち行み、舍らるれば則ち藏るるは、唯我と爾とのみこれあるかな。子路曰く、子三軍を行らむときは則ち誰と與にかせむ。子曰く、虎を暴(徒搏)し河を憑(徒涉)りて、死すとも悔るなきものは、吾與せざるなり、必ずや事に臨みて懼れ謀を好みて成す者に「與する」なり。

一一、子曰く、富にして求むべくんば執鞭の士(事)といへども、吾亦之を爲さむ、如し求むべからずんば、吾が好むところに従はむ。

一二、子の慎むところは、齊(齋)と戦と疾となり。

一三、子齊に在まして韶を聞くこと三月、肉の味を知らず、曰く、圖ざりき、樂を爲すことの斯に至らむとはと。

一四、冉有曰く、夫子は衛の君を爲(助)むか。子貢曰く、諾、吾將に之を問はむ。入りて曰く、伯夷叔齊は何人ぞや。曰く、古の賢人なり。曰く、怨たるか。曰く、仁を求めて仁を得たり、又何ぞ怨みむ。出でて曰く、夫子は爲けじ。

一五、子曰く、蔬食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げてこれを枕とするも、樂亦その中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮べる雲の如し。



一六、子曰、加我數年、五十以學、易可以無大過矣、

一七、子所雅言、詩書、執禮皆雅言也、

一八、葉公問孔子於子路、子路不對、子曰、汝奚不曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至<sup>○</sup>云爾、

一九、子曰、我非生而知之者、好古敏而求之者也、

二〇、子不語怪力亂神、

二一、子曰、我三人行、必得我師焉、擇其善者而從之、其不善者而改之、

二二、子曰、天生德於予、桓魋其如予何、

二三、子曰、二三子以我爲隱乎、吾無隱乎爾、吾無所行而不與二三子者、是丘也、

二四、子以四教、文行忠信、

二五、子曰、聖人吾不得而見之矣、得見君子者斯可矣、

二六、子曰、善人吾不得而見之矣、得見有恆者斯可矣、亡而爲有、虛而爲盈、約而爲泰、難乎有恆矣、

○釋文云、魯論は易を讀みて亦となす、蓋し易は亦と同音のため假借せられたるもの、

○雅言とは標準語を使ふ意、

○汝、唐石經女に作る、

○云爾は助辭、

○而、唐石經以に作る、

○恠、唐石經怪に作る、

○釋文云、一本我の字なく、得を有に作る、邢疏本是一本に同じく、此本及唐石經は釋文に同じ、

一六、子曰く、我に數年を加へ五十にして學ぶも、易（亦）大過なかるべし。

一七、子の雅言（詩と書）。禮を執（者）も皆（之を）雅言（なり）。

一八、葉公孔子を子路に問ふ、子路對へず。子曰く、汝奚ぞいはざる、その人と爲りや、發憤して食を忘れ、樂みて以て憂を忘れ、老の將に至らむとするを知らざるのみと。

一九、子曰く、我生れながらにして知れるものにあらず、古を好み敏めて求めたるものなり。

二〇、子怪力亂神を語らず。

二一、子曰く、我は三人行ふとき必ず我師を得、その善きものを選びて而（之）に從ひ、その善からざるものは而（之）を改む。

二二、「孔子宋にゆく、桓魋之を惡みて殺さむと欲す」、子曰く、天德を予（に）に生せり、桓魋それ予を如何せむ。

二三、子曰く、二三子我を以て隱すとなすか、吾は爾ら（に）に隱すことなきなり、吾は行ふ所として二三子と與（に）にせざる（こと）なし、是れ丘（の心）なり。

二四、子四つを以て教ふ、文と行と忠と信となり。

二五、子曰く、聖人は吾得て之を見ず、君子の者を見るを得ば斯（ち）可なり。

二六、子曰く、善人は吾得て之を見ず、恆（ある者）を見るを得ば斯（ち）可なり。亡（れ）れども有り



二七、子釣而不綱、弋不射宿、

二八、子曰、蓋有不知而作之者、我無是也、多聞擇其善者而從之、多見而識之、知之次也、

二九、五鄉難與言童子見、門人惑、子曰、與其進也、不與其退也、唯何甚、人潔己以進、與其潔也、不保其往也、

○潔、唐石經絜に作る、

三〇、子曰、仁遠乎哉、我欲仁、斯仁至矣、

三一、陳司敗問、昭公知禮乎、孔子對曰、知禮、孔子退、揖巫馬期而進之曰、吾聞、君子不黨、君子亦黨乎、君娶於吳、爲同姓謂之吳孟子、君而知禮、孰不知禮、巫馬期以告、子曰、丘也幸、苟有過、人必知之、

○娶、唐石經取に作る、

三二、子與人歌而善、必使反之而後和之、

なし、虚しけれども盈りとなし、約けれども泰なりとなすは、難いかな恆あること。

二七、子釣すれども綱せず、〔飛鳥を〕弋るも宿〔鳥〕を射ず。

二八、〔時人妄りに篇籍を作るもの多し〕。子曰く、蓋し知らずして作るものあらむ。我は是するなきなり、多く聞き、その善きものを選びて之に従ひ、多く見、〔その善きものを選びて〕、之を識す、〔これ知れるにはあらざるも〕知れるの次なり。

二九、五郷の與に言り難き童子見ゆ。門人惑へり。子曰く、その進まむには與するも、その退かむには與せざるなり。〔汝輩〕唯何ぞ甚しき、人己を潔して進まば、その潔きに與すべし、その往〔日の非〕を保〔守〕ざるべし。

三〇、子曰く、仁遠からむや、我仁を欲すれば、斯ち仁至る。

三一、陳司敗問ふ、昭公は禮を知れるか。孔子對へて曰く、禮を知れり。孔子退く。〔司敗〕巫馬期を揖して進みて曰く、吾君子は黨せずと聞きしが君子も亦黨するか、君吳に娶り、同姓なるが爲めに之を吳孟子と謂へり、君にして禮を知らば孰れか禮を知らざらむ。巫馬期以て〔孔子に〕告ぐ、子曰く、丘は幸なり、苟くも過あれば人必ず之を知れり。

三二、子、人と歌ひて善きときは、必ず之を反さしめて而して後之に和す。



三三、子曰、文莫吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得也、

○文莫は恣愼の假借、黽勉と同

三四、子曰、若聖與仁、則吾豈敢、抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已、

○唐石經倦倦に作る、

矣、公西華曰、唯唯弟子不能學也、

○正は誠なり、唯は爲と同じ、

三五、子疾病、子路請禱、子曰、有諸、子路對曰、有之、誅曰、禱爾于上、

○鄭本病の字なし、釋文云今本病の字ある非、

下神祇、子曰、丘之禱久矣、

三六、子曰、奢則不遜、儉則固、與其不遜也寧固、

○遜、唐石經孫に作る、

三七、子曰、君子坦蕩蕩、小人長戚戚、

三八、子溫而厲、威而不猛、恭而安、

○釋文、子一本子曰に作り、皇本君子に作る、

三三、子曰く、文莫（黽勉）は吾猶人の如きなり、躬に君子を行ふは則ち吾未だ得るあらざるなり。

三四、子曰く、聖と仁との若きは則ち吾豈敢てせむや、抑（然）ども爲（學）んで厭はず人を誨へて倦まずとは則ち謂ふべからむ。公西華曰く、正（誠）に弟子の學ぶ能はざるどころたり。

三五、子疾む。子路禱らむことを請ふ。子曰く、これ有りや。子路對へて曰く、あり、誅に爾を上下の神祇に禱るといへり。子曰く、丘の禱ること久し。

三六、子曰く、奢るときは則ち不遜なり、儉なるときは則ち固し、その不遜ならむよりは寧ろ固しからむ。

三七、子曰く、君子は坦して蕩蕩たり、小人は長く戚戚たり。

三八、子は溫なれども厲く、威あれども猛からず、恭しけれども安し。



論語泰伯第八 何晏集解 凡二十一章

一、子曰、泰伯其可謂至德也已矣、三以天下讓、民無得而稱焉、  
 二、子曰、恭而無禮則勞、慎而無禮則蕙、勇而無禮則亂、直而無禮則絞、君子篤於親、則民興於仁、故舊不遺、則民不偷、

○釋文得一本亦德に作る、後漢書丁鴻傳及劉祐傳此章を引く皆德に作る、一本と同意、

三、曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手、詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰、而今而後、吾知免夫、小子、

○冰、唐石經冰に作る、

四、曾子有疾、孟敬子問之、曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀、人之將死、其言也善、君子所貴乎道者三、動容貌斯遠暴慢矣、正顏色斯近信矣、出辭氣斯遠鄙倍矣、籩豆之事則有司存、

○道とは禮をいふ、

論語泰伯第八 凡二十一章

一、子曰く、泰伯はそれ至徳といふべきなり、三たび天下を以て讓れるも、民徳として稱するなし、「是れ至徳たる所以なり」。

二、子曰く、恭しくして禮なきときは則ち勞へ、慎みて禮なきときは則ち蕙る、勇にして禮なきときは則ち亂し、直にして禮なきときは則ち絞（急）し。君子親に篤あつきときは則ち民仁を興よほ（喜）び、故舊遺れざるときは則ち民偷いやしからず。

三、曾子疾あるとき、門弟子を召びて曰く、予足を啓け、予手を啓け、「吾身體を父母に受け、敢て此身を毀傷するあらむことを懼る」、詩に云く、「戰戰兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」と、而今よりして後、吾免れむことを知れり、小子よ。

四、曾子疾あり、孟敬子之を問ふ。曾子言て曰く、鳥の將に死なむとするときは、その鳴くこと哀し、人の將に死なむとするときは、その言ふこと善し、「吾將に死なむとす、汝よく吾言を聞け」。君子の道（禮）に貴ぶ所の者三つあり、容貌を動おさま（修）ては斯すなはち



五、曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友嘗從事於斯矣、

六、曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與、君子人也、

七、曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎、死而後已、不亦遠乎、

八、子曰、興於詩、立於禮、成於樂、

九、子曰、民可使由之、不可使知之、

一〇、子曰、好勇疾貧、亂也、人而不仁、疾之已甚、亂也、

一一、子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已、

一二、子曰、三年學不至於穀、不易得也、

○至は志と通ず、

○釋文、鄭玄曰、穀は祿也、

暴慢に遠ざかり、顔色を正しては斯ち信に近づき、辭氣を出しては斯ち鄙倍に遠ざかる。籩豆の事は則ち有司存せり、「君子能せずと雖も可なり」。

五、曾子曰く、能を以て不能に問ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きがごとく、實れども虚しきがごとく、犯されて校むくい（報）ず、昔者吾友嘗て斯に従事せり。

六、曾子曰く、以て六尺の孤（幼君）を託すべく、以て百里の命（國政）を寄すべく、大節に臨みて奪ふべからざるは、君子の人か、君子の人なり。

七、曾子曰く、士は以て弘毅ならざるべからず、任重くして道遠し、仁以て己が任となす、亦重からずや、死して後已む、亦遠からずや。

八、子曰く、詩に興り、禮に立ち、樂に成る。

九、子曰く、民は由らしむべし、知らしむべからず。

一〇、子曰く、勇を好みて貧を疾むときは亂す、人にして不仁ならば「當に之を風化すべし、若し」之を疾むこと已甚しければ亂せむ。

一一、子曰く、如し周公の才の美はしきあるも、驕且吝やぶさかならしめば、その餘は觀るに足らざるなり。

一二、子曰く、三年學びて穀（祿）に至（志）ざるは得易えやすからざるなり。



一三、子曰、篤信好學、守死善道、危邦不入、亂邦不居、天下有道則見、無道則隱、邦有道、貧且賤焉恥也、邦無道、富且貴焉恥也、

一四、子曰、不在其位、不謀其政也、

一五、子曰、師摯之始、關雎之亂、洋洋乎盈耳哉、

一六、子曰、狂而不直、侗而不愿、慳慳而不信、吾不知之矣、

一七、子曰、學如不及、猶恐失之、

一八、子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉、

一九、子曰、大哉、堯之爲君也、巍巍乎唯天爲大、唯堯則之、蕩蕩乎民

無能名焉、巍巍乎其有成功也、煥乎其有文章、

二〇、舜有臣五人而天下治、武王曰、予有亂臣十人、孔子曰才難、不其

然乎、唐虞之際、於斯爲盛、有婦人焉、九人而已、三分天下有其

二、以服事殷、周德其可謂至德也已矣、

○始は治に通ず、

○侗は無知の貌、慳慳は卑しくて文なきなり、不知之とは之を教ふる所以を知らざる意、

○釋文、亂十人一本或は亂臣十人に作る、唐石經臣の字行旁にあり、蓋し後人の補ふ所、もと亂十人に作る釋文と同じ、此本臣の字ある一本と合す、

○呂氏春秋古樂篇注、此章を引く、文王爲西伯三分天下云々とあり、今の論語は文王爲西伯の五字を脱す、  
○唐石經周之德に作る、

一三、子曰く、信に篤くして學を好み、死を守りて道を善し、危邦には入らず、亂邦には居

らず、天下道あるときは則ち見れ、道なきときは則ち隠れよ。邦に道あるとき貧しく

且つ賤しきは恥なり、邦に道なきとき富み且つ貴きは恥なり。

一四、子曰く、其位にあらざれば其政を謀らず。

一五、子曰く、師摯の關雎の亂を始(治)むる、洋洋乎として耳に盈るかな。

一六、子曰く、狂しくして直からず、侗にして愿ならず、慳慳して信あらざるは、吾これ

を〔教ふる所以を〕知らざるなり。

一七、子曰く、學は〔逃を追ひて〕及ばざるが如くするも、猶之を失はむことを恐る。

一八、子曰く、巍巍乎たるかな舜禹の天下を有てるや、〔賢臣に委任して身その事に〕與らず。

一九、子曰く、大なるかな、堯の君たるや、巍巍乎として唯天を大なりとなす、唯堯之に則

る、蕩蕩乎として民能く名るなし。巍巍乎としてそれ成功あり、煥乎としてそれ文章

あり。

二〇、舜に臣五人ありて天下治れり、武王曰く、予に亂(治事者)十人ありと。孔子は〔人〕

才〔得〕難しといふ、それ然らずや、唐虞の際(後)、斯(周)に於て盛なりとなす、

〔然ども猶〕婦人ありて〔男子は〕九人のみ。〔文王西伯となりて聖德あり〕天下を三



二一、子曰、禹吾無間然矣、非飲食而致孝乎鬼神、惡衣服而致美乎黻冕、卑宮室而盡力乎溝洫、禹吾無間然矣、

○間然は無間然と同じ、間とは非なり、無間然とは非難すべきなきをいふ、

分して其二を有ち、以て殷に服事す、周の徳はそれ至徳といふべきなり。

二一、子曰く、禹は吾れこれを間(非)べきなし、飲食を非くして孝を鬼神に致し、衣服を惡くして美を黻冕に致し、宮室を卑くして力を溝洫に盡くす、禹は吾れこれを間べきなし。







論語子罕第九 何晏集解 凡三十一章

- 一、子罕言利、與命與仁、
- 二、達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名、子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣、
- 三、子曰、麻冕禮也、今也純儉、吾從衆、拜下禮也、今拜乎上、泰也、雖違衆、吾從下、
- 四、子絕四、毋意、毋必、毋固、毋我、
- 五、子畏於匡、曰、文王既沒、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文、匡人其如予何、

○毋、史記無に作る、

○畏は圍と通ず、かこみとらはるる意、史記畏を拘に作る、

○唐石經也の字あり、

論語子罕第九 凡三十一章

- 一、子罕に利を言く。〔利をとくときは必ず〕命と與にし仁と與にす。
- 二、達巷黨の人曰く、大なるかな孔子、博く〔道藝を〕學びて、〔一藝を以て〕名を成す所べきなしと。子之を聞き、門弟子に謂つて曰く〔吾は道藝に通ぜず〕、吾何をか執らむ、御を執らむか、射を執らむか、吾は御を執らむ。
- 三、子曰く、〔宗廟の冠〕麻冕なるは〔古の〕禮なり、今純なるは儉つよまやかにせるなり、吾は衆に従ひ〔純を用ゐむ〕。〔君卿大夫を燕するとき、卿大夫君を階〕下に拜するは〔古の〕禮なり、今〔階〕上に拜するは泰おごれるなり、衆に違ふと雖も吾は下〔拜の禮〕に従はむ。
- 四、子四つを絶つ、意なく、必なく、固なく、我なし。
- 五、子匡に畏〔拘〕る。曰く、文王既に沒したれども、文は茲〔吾身〕にあらずや、天の將に斯文を喪ほろさむとするときは、後死者〔孔子自らいふ〕は斯の文に與かるを得ざるべし、天の未だ斯の文を喪さざらむとするとき、匡人それ予を如何せむ。



六、太宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也、子貢曰、固天縱之將聖、又多能也、子聞之曰、太宰知我困乎、吾少也賤、故多能鄙事、君子多乎哉、不多也、

○唐石經太を大に作る、下同

七、牢曰、子云吾不試故藝、

八、子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫、函問於我空空如也、我叩其兩端而竭焉、

○空空如、鄭本恠恠如に作る、つゝしめる貌、

九、子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫、

一〇、子見齊衰者冕衣裳者與瞽者、見之雖少圈必作、過之必趨、

一一、顏淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後、夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮、欲罷不能、既竭吾才、如有

○敬所云、齊衰者の下(雖狎必變)の四字を脱す、鄉黨第十三章參照、

所立卓爾、雖欲從之、未由也已、

○唐石經末を末に作る、

六、太宰子貢に問ひて曰く、夫子は聖者か、何ぞそれ多能なる。子貢曰く、固に天の縦る將(大)聖にして又多能なり。子之を聞いて曰く、太宰は我を知れる者か、吾少かりしとき賤しかりき、故に鄙事に多能なり、君子多ならむや、多ならざるなり。

七、牢曰く、子は吾試(用)られず故に藝ありと云へり。

八、子曰く、吾知るあらむや、知るなきなり。「然ども」鄙夫あり、來りて我に問ふ空空如たるときは、我その「終始」兩端を叩ねて「吾の知れる所を」竭くす。

九、子曰く、鳳鳥は至らず、河は圖を出さず、吾已ぬるかな。

一〇、子齊衰者を見るときは「狎れたりと雖も必ず容を變ず」。冕衣裳者(衣冠せるひと)と瞽者(樂師)とは、之を見るとき、少しと雖も必ず「坐を」作ち、之を過ぐるときは必ず趨る。

一一、顏淵喟然として歎じて曰く、之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅く、之を瞻て前にあるかとおもへば、忽焉として後にあり。夫子循循然として善く人を誘き、我を博くするに文を以てし、我を約かにするに禮を以てし、罷まむと欲する雖「罷む」能はざらしむ。既に吾才を竭くせば、立つ所ありて卓爾たるが如く、之に従はむと欲するも由る末きなり。



一二、子疾病、子路使門人爲臣、病間曰、久矣哉由之行詐也、無臣而爲有臣、吾誰欺、欺天乎、且予與其死於臣之手也、無寧死於二三子之手乎、且予縱不得大葬、予死於道路乎、

一三、子貢曰、有美玉於斯、韞匱而藏諸、求善賈而沽諸、子曰、沽之哉、沽之哉、我待賈者、

○唐石經句末也の字あり、

一四、子欲居九夷、或曰、陋如之何、子曰、君子居之、何陋之有、

一五、子曰、吾自衛反罔魯、然後樂正、雅頌各得其所、

一六、子曰、出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉、不爲酒困、何有於我哉、

一七、子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜、

一八、子曰、吾未見好德如好色者也、

一九、子曰、譬如爲山、未成一簣、止吾止也、譬如平地、雖覆一簣、進吾往也、

一二、子疾病やまひはなはだ。子路「葬るに大夫の禮を備へむと欲し」門人を臣たらしむ。病間あるとき曰く、久しいかな、由の詐いつはりを行へる、臣なきに臣有る爲まねして吾誰をか欺かむ、天を欺かむか。且つ予はその臣の手に死なむよりは無寧むしろ二三子の手に死なむか。且予縱たとひ大葬を得ずとも、予道路に死なむや。

一三、子貢曰く、斯に美玉あり、匱ひつきに韞つみて藏せむか、善賈を求めて沽らむか。子曰く沽らむかな、沽らむかな、我は賈かひてを待つものなり。

一四、子九夷に居らむことを欲す。或ひと曰く、陋いやしきを如何せむ。子曰く、君子之に居らば何の陋いやしきかこれあらむ。

一五、子曰く、吾衛より魯に反り、然して後樂正しく、雅頌各その所を得たり。

一六、子曰く、出でては則ち公卿に事へ、入ては則ち父兄に事へ、喪事は敢て勉めざるなく、酒の爲めに困みだれざること、我に於て何か有らむや。

一七、子川の上ほとりに在まして曰く、逝くものは斯の如きか、晝夜を捨てず。

一八、子曰く、吾未だ徳を好むこと色を好むが如き者を見ざるなり。

一九、子曰く、譬へば山を爲るが如し、未だ成らざる「僅かに」一簣なるも、止まるは吾止らむ。譬へば地を平にするが如し、雖たゞ（唯）一簣を覆すのみなるも、進まむには吾往



- 二〇、子曰、語之而不惰者、其回也與、
- 二一、子謂顏淵曰、惜乎、吾見其進也、未見其止也、
- 二二、子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫、
- 二三、子曰、後生可畏也、焉知來者之不如今也、四十五十而無聞焉、斯亦不足畏也已矣、

- 二四、子曰、法語之、言能無從乎、改之爲貴、異與之、言能無說乎、繹之爲貴、悅而不繹、從而不改、吾未如之何已也矣、
- 二五、子曰、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改、
- 二六、子曰、三軍可奪帥也、匹夫不可奪志也、
- 二七、子曰、衣弊緇袍、與衣狐貉者立而不恥者、其由與、
- 二八、「不佞不求、何用不臧」、子路終身誦之、子曰、是道也、何足以臧、

○言の字、焉と同音、則の字と意同じ、異遜通用、  
 ○繹釋同音、釋は改の意、  
 ○唐石經、悅を説に作り未を末に作り、已也を也已に作る、  
 ○此章學而篇と重出、唐石經無を母に作る、  
 ○唐石經弊を敝に作り、貉貉に作り、由の下也の字あり、  
 ○不佞不求、何用不臧の八字は詩衛風雄雉篇の句、

かむ。

- 二〇、子曰く、之に語つて惰もつからざるものはそれ回か。
- 二一、子、顔淵を謂つて曰く、惜いかな、吾その進むを見たるも、未だその止やむを見ざりき。
- 二二、子曰く、苗にして秀ひいでざるものあり、秀でて實みざるものあり。
- 二三、子曰く、後生をば畏るべし、焉いづぞ來者の今に如かざるを知らむや、四十五十にして聞ゆるなきは、これ亦畏るるに足らざるなり。
- 二四、子曰く、法もて之に語るときは、言ことばち能く従ふなからむや、之を改むるを貴しとなす。異もて之を與ゆるすときは言ことばち能く説よぶなからむや、之を繹あらむるを貴しとなす。説よびて繹あらめず、従つて改めざるときは、吾之を如何ともするなきなり。
- 二五、子曰く、忠信に主したしみ、己れに如かざるものを友とすることなかれ、過てば則ち改むるに憚ること勿れ。
- 二六、子曰く、三軍〔衆しと雖も人心一ならざれば〕帥を奪ふべし、匹夫〔微なりと雖も〕志を奪ふべからざるなり。
- 二七、子曰く、弊れたる緇袍を衣て、狐貉を衣たる者ひとと立ちて恥ぢざるものはそれ由か。
- 二八、「不佞やならず求めず、何もつを用てか臧いからざらむ」、子路終身之を誦す。子曰く、この道や



二九、子曰、歳寒、然後知松栢之後彫也。

三〇、子曰、智者不惑、仁者不憂、勇者不懼、

三一、子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、可與立、未可與權、「唐棣之華、偏其反而、豈不爾思、室是遠而」、子曰、未之思也、夫何遠之有哉、

○彫は凋に通ず、  
○唐石經智を知に作る、

○此逸詩也、偏は翩の假借動搖の貌、  
○邢疏本句末哉の字なし、

論語郷黨第十

何晏集解 舊凡一章 今改分十四章

一、孔子於郷黨恂恂如也、似不能言者、其在宗廟朝廷、便言唯謹爾、朝與下大夫言侃侃如也、與上大夫言誾誾如也、君在踧踖如也、與與如也、君召使擯、色勃如也、足躩如也、揖所與立、左右其

○恂恂は恭順の貌、  
○便言は平平の假借、閑雅の貌、  
○侃侃は衍衍の假借、和樂の貌、  
○誾誾は訢訢の假借、謹敬の貌、  
○踧踖は恭敬、與與は安舒の貌、

何を以て臧とするに足らむ。

二九、子曰く、歳寒くして、然して後、松栢の後に彫（凋）むを知る。

三〇、子曰く、智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず。

三一、子曰く、與に共に學ぶべきも、未だ與に道に適くべからず、與に道に適くべきも、未だ與に立つべからず、與に立つべきも未だ與に權るべからず。「詩に曰く」「唐棣の華、偏としてそれ反けり、豈に爾を思はざらむや、室是れ遠ければなり」と、子曰く、未だ之を思はざるなり、「もし誠に之を思はば」夫れ何の遠きことかこれあらむ。

論語郷黨第十

舊凡一章今改めて十四章に分つ

一、孔子郷黨に於ては恂恂如として言ふ能はざる者に似たり、其宗廟朝廷にありては便便として言唯（惟）謹めり。朝して下大夫と言ふときは侃侃如たり、上大夫と言ふときは誾誾如たり、君在すときは踧踖如たり、與與如たり、君召して擯せしむるときは、色勃如たり、足躩如たり、與に立てる所を揖するときは、其手を左右にして、衣の前



手、衣前後檐如也。趨進翼如也。賓退、必復命曰、賓不顧矣、入公門、鞠躬如也如不容、立不中門、行不履闕、過位色勃如也、足躩如也、其言似不足者、攝齊升堂鞠躬如也、屏氣似不息者、出降一等、遲顏色怡怡如也、沒階趨進翼如也、復其位蹠蹠如也、執圭鞠躬如也、如不勝、上如揖、下如授、勃如戰色、足躩蹠如有循、禮有容色、私覲愉愉如也、

○檐如はゆるる貌、  
○翼如はつゝしむ貌、  
○鞠躬如はつゝしむ貌、

二、君子不以紺纁飾、紅紫不以爲褻服、當暑纁絺綌、必表而出、緇衣羔裘、素衣麕裘、黃衣狐裘、褻裘長、短右袂、必有寢衣、長一身有半、狐貉之厚以居、去喪無所不佩、非惟裳必殺之、羔裘玄冠不以弔、吉月必朝服而朝、齊必有明衣布、匱、齋必變食、居必遷坐、食

○唐石經釋文纁を紵に作り、出下之の字あり、  
○一身とは胴體の長さをいふ、一身有半にて膝までの長なり、  
○唐石經貉を貉に作り、惟を帷に作る、  
○吉月は告月の誤、古、閏月には朔を告げず、他の月は朔を告げて廟に朝す、これを告月といふ、

後檐如たり、趨り進むときは翼如たり。賓退くときは必ず復命して賓顧みずと曰ふ。

公門に入るときは鞠躬如として容れられざるが如くす。立つときは門に中せず、行くときは闕を履まず、「君の」位を過ぐれば色勃如たり、足躩如たり、其言ふや足らざるものに似たり。齊を攝て堂に升るときは鞠躬如たり、氣を屏めて息せざるものに似たり。出でて一等を降り顔色を逞るときは怡怡如たり。階を沒して趨り進むときは翼如たり。その位に復へるときは蹠蹠如たり。圭を執るときは鞠躬如として勝へざるが如くす、上ぐるときは揖するが如くし、下ぐるときは授くるが如くす、勃如として戰色あり、足躩蹠如として循ふあり。享禮には容色あり、私に覲るときは愉愉如たり。

二、君子、紺纁を以て「衣」を飾らず、紅紫以て褻服を爲らず、暑に當りては纁の絺綌に必ず表して出づ。緇衣には羔の裘、素衣には麕の裘、黃衣には狐の裘、褻の裘は長くして右の袂を短く。「臥るときは」必ず寢衣あり、長一身有半、狐貉の「皮の」厚きを「敷きて」居る。喪を去いては佩びざる所なく、帷裳(朝祭服)にあらざるものは必ず之をふち殺ぐ。羔裘玄冠しては以て弔せず、月「朔」を吉(告)とき必ず朝服して「廟に」朝す。齊(沐浴)するときは必ず明衣あり、布「を用ふ」。齋するときは必ず食を變じ「て盛饌を設け」、居必ず坐を遷して「正寢に居る」、食は精を厭はず、膾



不厭精、膾不厭細、食饘而餲魚餒而肉敗不食、色惡不食、臭惡不食、失飪不食、不時不食、割不正不食、不得其醬不食、肉雖多不使勝食氣、唯酒無量、不及亂、沽酒市脯不食、不撤薑食、不多食、祭於公不宿肉、祭肉不出三日、出三日不食之矣、食不語、寢不言、雖疏食菜羹瓜祭必齊如也、席不正不坐、鄉人飲酒、杖者出斯出矣、鄉人儺、朝服而立阼階、問人於他邦、再拜送之、

○史記而の字なし、

○齊如は嚴敬の貌、

○唐石經立下於の字あり、拜下而の字あり、

- 三、康子饋藥、拜而受之、曰、丘未達、不敢嘗、
- 四、廐焚、子退朝曰、傷人乎、不問馬、
- 五、君賜食、必正席先嘗、君賜腥、必熟而薦之、君賜生、必畜之、
- 六、侍食於君、君祭先飯、

○唐石經先嘗之、  
○唐石經熟を孰に作る、

は細を厭はず、食の饘れて餲たる、魚の餒肉の敗たるは食はず、色の惡しきは食はず、臭の惡しきは食はず、失飪（爛熟）たるは食はず、時ならざるは食はず、割正しからざれば食はず、其醬を得ざれば食はず、肉は多しと雖も食氣（飯氣）に勝たしめず、酒量なしと唯（雖）も亂に及ばず、沽酒、市脯は食はず、薑を撤らずして食ふ、多く食はず。公に祭りするときは肉を宿せず、祭肉は三日を出さず、三日を出でたるは之を食はざるなり。食するときは語らず、寢るときは言はず、疏食菜羹瓜と雖も祭るときは必ず齊如たり。席正しからざれば坐らず、郷人の飲酒するとき、杖者（老人）出づれば斯ち出づ。郷人の儺するときは、朝服して阼階に立つ。人を他邦に問（遣）るときは再拜して之を送る。

- 三、康子藥を饋る、拜して之を受けしも、丘未だ「此藥何の疾を治するかを」達らずといひて、敢て嘗めたまはず。
- 四、廐焚たり、子朝より退き、人を傷へるかとのみいひて馬を問ひたまはず。
- 五、君、食を賜ふときは、必ず席を正して先づ之を嘗む、君、腥を賜ふときは、必ず熟て之を「祖廟に」薦む、君生を賜ふときは必ず之を畜ふ。
- 六、君に侍食するとき、君祭すれば先づ飯ふ。



七、疾君視之、東首加朝服、拖紳、

八、君命召、不俟駕行矣、

九、入太廟、每事問、

一〇、朋友死無所歸、曰於我殯、朋友之饋、雖車馬、非祭肉、不拜、

一一、寢不尸、居不容、

一二、子見齊衰者、雖狎必變、見冕者與瞽者、雖褻必以貌、凶服者式之、

式負版者、有盛饌必變色而作、迅雷風烈必變、

一三、升車、必正立執綏、車中不內顧、不疾言、不親指、

一四、色斯舉矣、翔而後集、曰、山梁雌雉、時哉、時哉、子路供之、三嗅

而作、

○唐石經拖を地に作る、

○太、唐石經大に作る、

○唐石經及釋文容を客に作る、

○徂徠云、式負版者の四字は注文の誤りて本文と成れるもの、凶服前に衰あり後に負板あり、負版は即負板にして負版者は即ち凶服者なるべし、

○魯論には不の字なし、車中内顧とは車外をのぞかざるなり、

○色斯は色然と同じ、驚飛の貌、

○時とは善なり、

○供唐石經共に作る、向ふ也、

○嗅、說文騷に作る、五經文字云、說文騷の字經傳相承て嗅に作る論語借て臭に作る、臭は蓋し臭の誤、臭とは兩翅を張る也、

七、疾ありて、君之を視たまふときは、東首して朝服を加へ紳を拖く。

八、君、命して召すときは駕を俟たずして行く。

九、大廟に入りて事ごとに問へり。

一〇、朋友死して歸る所なければ我がもとに於て殯せよといふ、朋友の饋は、車馬と雖も祭肉にあらずんば拜せず。

一一、寢るときは尸の如くせず、居るときは客の如くせず。

一二、子齊衰者を見るときは狎たりと雖も必ず「容を」變ず、冕者と瞽者とを見るときは褻たりと雖も必ず「禮」貌を以てす、凶服者之を式す、(負版者を式す)。盛饌あるときは必ず色を變じて作つ、迅雷風烈しきときも必ず「色」を變ず。

一三、車に升るときは必ず正しく立ちて綏を執る、車の中にては内顧して疾言せず、親指せず。

一四、「孔子山に行いて雌雉を見る」、色斯(色然)て舉り翔つて後集る。曰く、山梁の雌雉時(善)かな時いかなと。子路之に共(向)へば、三たび具けて作(立)つ。



論語卷第六



論語先進第十一

何晏集解

舊二十三章  
今改分二十六章

- 一、子曰、先進於禮樂野人也、後進於禮樂君子也、如用之、則吾從先進、
- 二、子曰、從我於陳蔡者、皆不及門圈也、
- 三、德行顏淵閔子騫冉伯牛仲弓、言語宰我子貢、政事冉有季路、文學游子夏、
- 四、子曰、回也非助我者也、於吾言無所不說、
- 五、子曰、孝哉、閔子騫、人不問於其父母兄弟之言、
- 六、南容三復白圭、孔子以其兄之子妻之、

○也是邪と同じ、非の上豈の字をそへてよむべし、  
○兄、唐石經昆に作る、釋文同じ、

論語先進第十一

凡二十三章

今改めて二十六章に分つ

- 一、子曰く、先進の禮樂に於けるや野人なり、後進の禮樂に於けるや君子なり、如し之を用るば吾は先進に従はむ。
- 二、子曰く、我に陳蔡に従へる者は、皆〔仕進の〕門に及ばざるなり。
- 三、德行には顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語には宰我・子貢、政事には冉有・季路、文學には子游・子夏。
- 四、子曰く、回は〔豈〕我を助くる者にあらずや、吾言に於て説〔悦〕びざる所なし。
- 五、〔閔子騫の母死して其父更に娶る、後母二子を生みて子騫を遇する酷し、其父、之を出さむと欲せるも子騫諫めて之を留め、之に事へて彌謹めり。〕子曰く、孝なるかな閔子騫、人その父母昆弟を問の言あらずと。
- 六、〔詩に云ふ、白圭の玷たるは尙磨くべし、斯の言の玷たるは爲むべからずと〕、南容〔詩を讀みて〕三たび白圭を復す、孔子〔慎言の志あつきを見て〕其兄の子を以て之に



七、季康子問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顏回者、好學、不遷怒不

貳過、不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也、

八、顏淵死、顏路請子之車、子曰、才不才、亦各言其子也、鯉死有棺

而無槨、吾不回徒行以爲之槨、以吾從大夫之後吾以不可徒行也、

九、顏淵死、子曰、噫天喪予、天喪予、

一〇、顏淵死、子哭之慟、從者曰、子慟矣、子曰有慟乎、非夫人之爲慟、  
而誰爲慟、

一一、顏淵死、門人欲厚葬之、子曰、不可、門人厚葬之、子曰、回也視予

猶父也、予不得視猶子也、非我也、夫二三子也、

一二 季路問事鬼神、子曰、未能事人、焉能事鬼、曰敢問團死、曰未知  
生、焉知死、

〇二句十二字諸本なし、此本

蓋し雍也第三章によつて補

益する所、刪るべし、

〇唐石經車下、(以爲之槨)の

句あり、

〇鯉下也の字あり、

〇槨、椁に作り、

〇吾不の下可の字なく、

〇後の下吾以二字なし、

妻はす。

七、季康子問ふ、弟子孰たれか學を好むと爲す。孔子對て曰く、顏回といふ者ひとありて學を好み  
しが、不幸短命にして死し、今は則ち亡なし。

八、顏淵死す、顏路子の車を請ひて以てこれが槨つくを爲らむとす。子曰く、「淵の」才あるも、  
〔鯉の〕不才なるも〔父よりすれば〕亦各も其子いづれといふべし、「吾子」鯉の死せるとき

棺ありて槨なかりしは吾徒行かちあるきして以てこれが槨つくを爲るべからざりしなり、「今も」吾大  
夫の後に從へるを以て徒行すべからざるなり。

九、顏淵死す、子曰く、噫天予を喪ほろぼせり、天予を喪せり。

一〇、顏淵死す、子哭して慟す。從者曰く、子慟せりと。子曰く、慟するありしか、夫人かみの  
ために慟するに非ずして誰が爲めにか慟せむ。

一一、顏淵死す、門人厚く葬らむと欲す、子曰く不可なり、門人厚く葬る。子曰く、回は予  
を視ること猶父の如くなりしも、予は視ること猶子の如くするを得ざりき、我にはあ  
らず夫二三子なり。

一二、季路鬼神に事へむことを問ふ、子曰く、未だ人に事ふる能はず、焉ぞ能く鬼に事へむ。  
曰く、敢て死を問ふ、曰く未だ生を知らず、焉ぞ死を知らむ。



一三、閻子騫侍側、閻閻如也、子路行行如也、冉子子貢侃侃如也、子樂曰、若由也不得其死然、

一四、魯人爲長府、閻子騫曰、仍舊貫如之何、何必改作、子曰、夫人不言、言必有中、

一五、子曰、由之闕瑟、奚爲於丘之門、門人不敬子路、子曰、由也升堂矣、未入於室也、

一六、子貢問、師與商也孰賢、子曰、師也過、商也不及、曰、然則師愈與、子曰、過猶不及也、

一七、季氏富於周公、而求也爲之聚斂而附益之、子曰、非吾徒也、小子鳴鼓而攻之、可也、

一八、柴也愚、參也魯、師僻也、由喭也、

一九、子曰、回也其庶乎屢空、賜不受命而貨殖焉、億則屢中、

二〇、子張問善人之道、子曰、不踐迹、亦不入於室、

二一、子曰、論篤是與、君子者乎、色莊者乎、

○閻閻は謹敬の貌、行行は峻峻の假借にて倨敖の貌、侃侃は衍衍の假借にて和樂の貌、

○子樂曰、文選注引樂字なく、唐石經は曰字なし、此本樂曰兩字を存す樂の字恐らく衍、

○然は焉と同音假借、唐石經鼓の字なし、此本鼓瑟蓋し注文によりて衍する所削るべし、

○唐石經下二句師也僻、由也喭に作る、

○億、唐石經億に作り、漢書引意に作る、億億意同義、

一三、閻子騫側に侍る、閻閻如たり、子路は行行如たり、冉子と子貢とは侃侃如たり。子曰く、由の若きは其の死を得じ。

一四、魯人長府（魯昭公の別館）を爲る。閻子騫曰く、舊に仍りて貫はば如何、何ぞ必ずしも改め作らむ。子曰く、夫の人は言はず、言へば必ず中る。

一五、子曰く、由の瑟（雅頌に合せず）、奚爲ぞ丘が門に於てせむ。門人子路を敬はず、子曰く、由は堂に升れるも、未だ室に入らざるなり。

一六、子貢問ふ、師と商と孰か賢る、子曰く、師は過ぎたり、商は及ばず。曰く、然らば則ち師愈れるか、子曰く、過ぎたるは猶及ばざるがごとし。

一七、季氏周公より富めり、而して求はこれが爲めに聚斂して附益す。子曰く、吾徒にあらざらず、小子鼓を鳴して攻めて可なり。

一八、柴（高柴）は愚、參（曾子）は魯、師（子張）は僻（便僻）、由（子路）は喭（喭諺）。

一九、子曰く、回はそれ「命を受くるに」庶か、屢空し、「而も其樂を改めず」、賜は命を受けずして貨殖す、「然れども」憶れば則ち屢中る。

111 卷 二〇、子張善人の道を問ふ、子曰く、迹「前言往行」を踐まざれば、亦室に入らざるなり。  
二一、子曰く、論の篤きにのみ是れ與すれば、君子の者か色莊者か「を知る能はざるなり」。



二三、子路問、聞斯行諸、子曰、有父兄在、如之何其聞斯行之圃、冉有問、聞斯行諸、子曰、聞斯行之、公西華曰、由也問、聞斯行諸、子曰、有父兄在、求也問、聞斯行諸、子曰、聞斯行之、赤也惑、敢問、子曰、求也退、故進之、由也兼人、故退之、

二三、子畏於匡、顔淵後、子曰、吾以汝爲死矣、曰、子在回何敢死、

二四、季子然問、仲由冉求可謂大臣與、子曰、吾以子爲異之間、曾由與求之間、所謂大臣者、以道事君、不可則止、今由與求也、可謂具

臣矣、曰、然則從之者與、子曰、弑父與君亦不從也、

二五、子路使子羔爲費宰、子曰、賊夫人之子、子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書然後爲學、子曰、是故惡夫佞者、

○兼は勝なり、

○畏、史記拘に作る、  
○汝、唐石經女に作る、

二三、子路問ふ、聞くまゝにこれ行はむか。子曰く、父兄いさま在すあり、如何ぞ、其それ聞くまゝに斯れ行はむ。冉有問ふ、聞くまゝに斯れ行はむか。子曰く、聞くまゝに斯れ行へ。公西華曰く、由が聞くまゝに斯れ行はむかと問へるとき、子は父兄在すありと曰のたまへり、〔然るに〕求が聞くまゝに斯れ行はむかと問へるとき、子は聞くまゝに斯れ行へと曰のたまふ。赤は惑へり、敢て問ふ。子曰く、求は退く、故に之を進む、由は人を兼かたんとす、故に之を退く。

二三、子匡に畏おそ（拘）はれしとき、顔淵後る。子曰く、吾女なんぢを以て死せりとなせり。曰く、子在まさは、回何ぞ敢て死せむ。

二四、季子然問ふ、仲由と冉求とは大臣と謂ふべきか。子曰く、吾子われを以て異（他事）を問ふならむと爲おもしが、曾さあで由と求とのことをしも問へるか。所謂大臣とは道を以て君に事へ、不可なるときは則ち止む、（諫めて可きかれずば則ち退く）。今由と求とは〔諫むべくして諫めず〕具臣（徒らに臣の數に備はるもの）といふべし。曰く、然らば則ち之これ〔たゞ主命〕に従ふものか。子曰く、父と君とを弑せしめむとするときは亦從はざるべし。

二五、子路子羔をして費の宰たらしむ。子曰く、夫人かのの子を賊そこなはむ。子路曰く、民人あり、



二六、子路・曾皙・冉有・公西華侍坐、子曰、以吾一日長乎爾、無吾以也、

○無、唐石經母に作る、  
○釋文云、吾以鄭本已に作る、  
已は止也、

居則曰、不吾知也、如或知爾則何以哉、子路率爾而對曰、千乘之國、攝乎大國間、加之以師旅、因之以飢饉、由也爲之、比及三年、可使有勇且知方也、夫子晒之、求爾何如、對曰、方六七十、如五

○唐石經國下之字あり、  
○飢、唐石經饑に作る、

六十、求也爲之、比及三年、可使足民、如其禮樂、以俟君子、赤

爾何如、對曰、非曰能之也、願學焉、宗廟之事、如會同、端章甫、

願爲小相焉、點爾何如、鼓瑟希、鐸爾舍瑟而作、對曰、異乎三子

○說文擯爾、

者之撰、子曰、何傷乎、亦各言其志也、曰、暮春者春服既成、羸冠

○撰鄭本僕に作り讀みて詮となす、詮とは善なり、

者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、夫子喟然歎

○暮、唐石經莫に作る、  
○浴筆解沿に作る、

曰、吾與點也、三子者出、曾皙後、曾皙曰、夫三子者之言何如、子

○風放と通ず、至る意、

社稷あり、何ぞ必ずしも書を讀みて、然して後學びたりと爲さむ。子曰く、是の故に夫佞者かのへいしやものを惡む。

二六、子路・曾皙・冉有・公西華侍坐せり。子曰く、吾一日爾なんぢたちに長ぜるを以て〔對へずし

て〕已むやことなかれ、〔爾〕居つねに〔常居〕則ち〔人皆〕吾を知らずといふ、如し爾なんぢたちを知

りて〔用ふる〕あらば則ち何をか以な〔爲〕さむ。子路率爾として對へて曰く、千乗の

國大國の間に攝はさまりて加ふるに師旅を以てし因かぬるに饑饉を以てせむとき、由これを

爲なめば、三年に及ばむ比くら、勇あり且つ方みちを知らしめむ。夫子之を晒ふ。求よ爾なんぢは何如。

對へて曰く、方六七十、如しくは五六十〔里の國〕、求之を爲めば三年に及ばむ比くら、民

を足らしむべし、その禮樂の如きは以て君子に俟またむ、赤よ爾いは何如。對へて曰く、

これを能くすといふにあらざれども願くは學びがてらにせむ、宗廟まつりの事如しくは會同

のとき、玄端〔を衣〕章甫〔を冠り〕願くは小相こととならむ。點よ爾なんぢは何如、鼓瑟希と

だえ鐸爾として瑟さしを舍さきて作たち、對へて曰く、三子者の撰よきに異なり。子曰く、何ぞ傷

まむ、亦各その志をいふなり。曰く暮春春服既に成り、冠者五六人童子六七人を得て、

沂〔水の上〕に沿ひ舞雩〔の下〕に風〔放〕り詠じて歸らむ。夫子喟然として歎じて

曰く、吾は點に與せむ。三子者出でて曾皙後る。曾皙曰く、夫の三子者の言いは何如。



曰、亦各言其志也已矣、曰、夫子何哂由也、子曰、爲國以禮、其言不讓、是故哂之、唯求則非邦也與、安見方六七十如五六十而非邦也者、唯赤則非邦也與、宗廟之事如會同非諸侯如之何、赤也爲之小相、孰能爲之大相、

○唯雖通ず、  
○唐石經、如之何の三字磨改して而何の二字となす、

論語顏淵第十二 何晏集解 凡二十四章

一、顏淵問仁、子曰、克己復禮爲仁、一日克己復禮、天下歸仁焉、爲

○克、唐石經克に作る克剋同

仁由己、而由人乎哉、顏淵曰、請問其目、子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動、顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣、

○敬所云、一日は一日の誤、其下九字は克己復禮爲仁の句の異文を注せるもの誤つて本文と成れるもの、

二、仲弓問仁、子曰、出門如見大賓、使民如承大祭、己所不欲、勿施

○而の字豈の意をふくむ、

子曰く、亦各その志を言へるのみ。曰く夫子何ぞ由を哂へる。子曰く、國を爲むるには禮を以てし、〔禮は讓を貴ぶ而して〕その言讓ならず、是故に之を哂へり。求と唯も則ち邦に非ずや、安ぞ方六七十如しくは五六十にして邦にあらざるものを見む。赤と唯も則ち邦に非ずや、宗廟と會同とは諸侯にあらざりて如何せむ。赤これが小相たらば、孰れか能くこれが大相と爲らむ。

論語顏淵第十二 凡二十四章

一、顏淵仁を問ふ、子曰く、己を克て禮に復へるを仁と爲す（一に曰く、己を克めて禮に復れば天下仁に歸す）、仁を爲す己に由る而（豈）人に由らむや。顏淵曰く、請ふその目（要）を問はむ。子曰く、禮に非ざれば視ること勿れ、禮にあらざれば聽くこと勿れ、禮にあらざれば言ふこと勿れ、禮にあらざれば動くこと勿れ。顏淵曰く、回不敏と雖も請ふ斯の語を事めむ。

二、仲弓仁を問ふ。子曰く、門を出づるときは大賓を見るが如くにし、民を使ふには大祭



於人、在邦無怨、在家無怨、仲弓曰、雍雖不敏、請事斯語矣、

三、司馬牛問仁、子曰、仁者其言也訥、曰、其言也訥、斯可謂之仁

已矣乎、子曰、爲之難、言之得無訥乎、

四、司馬牛問君子、子曰、君子不憂不懼、曰、不憂不懼、斯可謂君子

○唐石經、謂之君子、

已乎、子曰、內省不疚、夫何憂何懼、

五、司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、

富貴在天、君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之內、皆爲兄弟也、

君子何患乎無兄弟也、

○敬所云下句によつて之を推すに、此の所「執事」の二字を脱するか、

六、子張問明、子曰、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣、浸

潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂遠也已矣、

七、子貢問政、子曰、足食足兵、匱民信之矣、子貢曰、必不得已而去

に承まつるが如くにし、己の欲せざるところは人に施すなければ、邦にありても怨ま  
るゝなく、家にありても怨まらるゝなからむ。仲弓曰く、雍不敏と雖も請ふ斯語を事め  
む。

三、司馬牛仁を問ふ。子曰く、仁者は其言いふこと訥し。曰く、其言ふこと訥き、斯ちこ  
れを仁と謂ふべきか。子曰く、爲こと難ければ言ふこと訥きなきを得むや。

四、司馬牛君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず懼れず。曰く、憂へず懼れざる、斯ち之を  
君子と謂ふべきか。子曰く、内に省みて疚からざれば夫れ何をか憂へ何をか懼れむ。

五、司馬牛「その兄桓魋の亂をなして將に喪びむとするを見て」憂へて曰く、人は皆兄弟  
あれども我獨り亡からむとすと。子夏曰く、商これを聞けり、死生命あり富貴天にあ  
り、君子「事を執ふに」敬みて失なく、人に與り恭しくして禮あらば、四海の内皆兄  
弟たらむと、君子何ぞ兄弟なきを患へむ。

六、子張明を問ふ。子曰く、浸潤の譖（徐々に人心に浸みこましめる誹謗）と膚受の愬  
（内實なき訴）と行はれざる明と謂ふべし。浸潤の譖と膚受の愬と行はれざれば遠とも  
謂ふべし。

七、子貢政を問ふ。子曰く、食を足らしめ、兵を足らしめ、民をして信あらしめよ。子貢



於斯三者、何先、曰去兵、曰必不得已而去於斯二者、何先、曰去食、自古皆有死、民不信不立、

八、棘子城曰、君子質而已矣、何以文爲矣、子貢曰、惜乎夫子之說也、君子也、駟不及舌、文猶質也、質猶文也、虎豹之鞞、猶犬羊之鞞也、

九、哀公問於有若曰、年飢用不足、如之何、有若對曰、盍徹乎、曰、二吾猶不足、如之何其徹也、對曰、百姓足、君孰與不足、百姓不足、君孰與足、

一〇、子張問崇德辨惑、子曰、主忠信徙義、崇德也、愛之欲其生、惡之欲其死、既欲其生、又欲其死、是惑也、誠不以富亦祇以異、  
一一、齊景公問政於孔子、孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子、公曰、善

○日字の上唐石經子貢二字あり、  
○不、唐石經無に作る、

○城、唐石經成に作る、  
○唐石經之字なし、此本之字恐らくは衍、

○鞞、唐石經鞞に作る、釋文石經に同じく、說文此本と合す、

○飢、唐石經饑に作る、  
○徹、漢石經肆、肆古音徹、徹とは周代の税法、又斂法ともいふ、其年の收穫を見分してその十分の一を課するをいふ、魯宣公十五年新たに税法を定めて十分の二を課す、哀公の時猶之に従ふ、故に二猶不足といふなり、

○也下八字詩小雅我行其野の句、程子云、此二句錯簡、當に第十六篇齊景公有馬千駟の上にあるべし、

曰く、必ず已むを得ずして去かむとするときは、斯三者に於て何をか先にすべき。曰く、兵を去け。子貢曰く、必ず已むを得ずして去かむとするときは、斯二者に於て何をか先にすべき。曰く、食を去け、古より皆死あり、民信なくんば〔國〕立たず。

八、棘子城曰く、君子は質のみ、何を以てか文を爲さむ。子貢曰く、惜しいかな夫子の君子を説くや、〔過言一たび出づれば〕駟も舌に及ばず、〔もし〕文は猶質のごとく、質は猶文のごとし〔といひて、質のみを尙べば〕虎豹の鞞は猶犬羊の鞞のごとくにして〔分つなからむ〕。

九、哀公有若に問ひて曰く、年饑えて用足らず、如何にすべき。有若對へて曰く、盍ぞ徹〔十分一を課〕せざる。曰く、〔十分の一〕二も吾猶足らず、如何ぞ、それ徹せむや。對へて曰く、百姓足らば君孰とともにか足らざらむ、百姓足らずんば君孰とともにか足らむ。

一〇、子張崇德辨惑を問ふ。子曰く、忠信〔の人〕に主みて義に徙るは崇徳なり。愛するときは其生を欲し、惡むときは其死を欲するは、〔人の情なり、然ども〕既に其生を欲して又其死を欲するは、是れ惑なり。

一一、齊の景公政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子た



哉、信如君不君、臣不臣、父不父、子不子、雖有粟、吾豈得而食諸、

一二、子曰、片言可以折獄者、其由也與、子路無宿諾、

一三、子曰、聽訟吾猶人也、必也使無訟乎、

一四、子張問政、子曰、居之無倦、行之以忠、

一五、子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫、

一六、子曰、君子成人之美、不成人之惡、小人反是、

一七、季康子問政於孔子、孔子對曰、政者正也、子帥而正、孰敢不正、

一八、季康子患盜、問於孔子、孔子對曰、苟子之不欲、雖賞之不竊、

一九、季康子問政於孔子、曰、如殺無道以就有道、何如、孔子對曰、子

爲政、焉用殺、子欲善而民善矣、君子之德風、小人之德草、草上之風必偃、

○片言は猶一言のごときなり、

○子路、釋文云、或は此を分て別章となす、按ずるに此別章にあらず、又孔子の言にあらず、後人追記の辭、

○諸本子帥以正に作る、以而通、

○縮臨古本苟下「子之」二字を脱す、諸本皆有り、

らしむべし。公曰く、善いかな、信に如し君君たらず、臣臣たらず、父父たらず、子

子たらずんば、粟ありと雖も、吾豈得てこれを食はむや。

一二、子曰く、片言（一言）以て獄を折べきはそれ由か、子路は諾せることを宿ふなければ。

一三、子曰く、訟を聽かば、吾も猶人のごとくならむ、「吾は」必ず訟なからしめむか。

一四、子張政を問ふ。子曰く、「身は正位に」居りて倦ることなく、之を「民に」行ふには忠を

以てせよ。

一五、子曰く、博く文を學び、之を約にするに禮を以てすれば、今「道に」畔かざるべし。

一六、子曰く、君子は人の美を成して人の惡を成さず、小人は是に反す。

一七、季康子政を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、政とは正なり、子帥めて正しければ孰か敢

て正しからざらむ。

一八、季康子盜を患へて孔子に問ふ。孔子對へて曰く、苟子にして欲するなくんば、これを賞すと雖も竊まじ。

六 一九、季康子政を孔子に問ひて曰く、如し無道を殺して有道を就（成）さば何如。孔子對へて曰く、子政を爲すに焉ぞ殺すことを用ゐむ、子善を欲せば而ち民善からむ、君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草はこれに風を上（加）るとき必ず偃す。



二〇、子張問、士何如斯可謂之達也、子曰、何哉爾所謂達者矣、子張對曰、在邦必聞、在家必聞、子曰、是聞也、非達也、夫達者、質直而好義、察言而觀色、慮以下人、在邦必達、在家必達、夫聞者色取仁而行違、居之不疑、在邦必聞、在家必聞、

○者字恐らくは衍、

○唐石經達下及び聞下、也の字あり、

二一、樊遲從遊於舞雩之下、曰、敢問崇德脩慝辨惑、子曰、善哉問、先事後得、非崇德與、攻其惡毋攻人之惡、非脩慝與、一朝之忿忘其身以及其親、非惑與、

○毋、唐石經無、

二二、樊遲問仁、子曰愛人、問智、子曰知人、樊遲未達、子曰、舉直錯諸枉、能使枉者直、樊遲退、見子夏曰、嚮也吾見於夫子而問智、子曰、舉直錯諸枉能使枉者直、何謂也、子夏曰、富哉闕言乎、舜有天下、選於衆舉皐陶、不仁者遠矣、湯有天下、選於衆舉伊尹、不仁者遠矣、

○智、唐石經知、

○釋文云錯或は措に作る、爲政第十九章參照、

○嚮、釋文郷に作る、

○是字唐石經なし、恐らくは衍、

二〇、子張問ふ。士の何如をか斯れ達と謂ふべき。子曰く、何ぞや爾の謂ふ所の達とは。子張對へて曰く、邦にありても必ず聞え、家にありても必ず聞ゆるなり。子曰く、是れ聞なり、達にあらざるなり。夫れ達者は質直にして義を好み、言「語」を察にして

〔顔〕色を觀、慮りて以て人に下り、邦にありても必ず達れ、家にありても必ず達るるなり。夫れ聞者は色は仁を取りて行違ひ、〔安〕居して〔自ら〕疑はず、邦にありても必ず聞え、家にありても必ず聞ゆるなり。

二一、樊遲從つて舞雩の下に遊ぶ。曰く、敢て崇徳と脩慝と辨惑とを問ふ。子曰く善いかな問へること、先づ事めて後に得るは、崇徳にあらざるや、その惡を攻めて人の惡を攻むるなきは脩慝にあらざるや、一朝の忿に其身を忘れて以て其親に及ぶは惑にあらざるや。

二二、樊遲仁を問ふ、子曰く人を愛せよ。智を問ふ、子曰く、人を知れ。樊遲未だ達らず、子曰く、直を擧げてこれを枉れる〔人の上に〕錯くときは、能く枉れる者をして直からしむ。樊遲退ぞき子夏に見えて曰く、嚮に吾夫子に見えて智を問ひしに、子は直を擧げてこれを枉れる〔人の上〕に錯くときは能く枉れる者をして直からしめむと曰へり、何の謂ぞや。子夏曰く、富なるかな言や、舜天下を有るとき衆に選びて皐陶を擧げしかば不仁者遠かりぬ、湯天下を有るとき、衆に選びて伊尹を擧げしかば不仁



二三、子貢問友、子曰、忠告而以善導之、否則止、無自辱焉、  
二四、曾子曰、君子以文會友、以友輔仁、

○唐石經、導を道、否を不可、  
無を毋に作る、

者遠かりぬ。

二三、子貢友を問ふ。子曰く、忠告して善を以て之を導びき、きかれざる否(不可)ときは則ち止めて  
自ら辱むることなかれ。

二四、曾子曰く、君子は文を以て友を會し、友を以て仁を輔く。



論語卷第七



論語子路第十三 何晏集解 凡三十章

- 一、子路問政、子曰、先之勞之、請益、曰、無倦、
- 二、仲弓爲季氏宰、問政、子曰、先有司、赦小過、舉賢才、曰、焉知賢才而舉之、曰、舉爾所知、爾所不知、人其舍諸、
- 三、子路曰、衛君待子而爲政、子將奚先、子曰、必也正名乎、子路曰、有是哉、子之迂也、奚其正、子曰、野哉由也、君子於其所不知蓋闕如也、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興則刑罰不中、刑罰不中則民無所措手足、故君子名之必可言也、言之必可行也、君子於其言無所苟而已矣、

○蓋闕如は區蓋如と同じ、言はざる貌、  
 ○履軒云、事不成より手足に至る六句、疑らくは後人の竄入、刪るべし、

論語子路第十三 凡三十章

- 一、子路政を問ふ。子曰く、先して勞せよ。「子路子の言を以て簡となし」益さむことを請ふ。曰く、倦むことなかれ。
- 二、仲弓季氏の宰となりて政を問ふ。子曰く、有司を〔擇ぶを〕先とす、「有司を擇ぶには」小過を赦して賢才を舉げよ。曰く、焉ぞ賢才を知つて之を舉げむ。曰く、爾の知れる所を舉ぐれば、爾の知らざる所は、人それこれを捨てむや。
- 三、子路曰く、衛の君、子を待ちて政を爲さしむれば子將に奚をか先にせむ。子曰く、必ず名を正さむか。子路曰く、是れあるかな、子の迂なる、奚ぞそれ正さむ。子曰く、必野なるかな由や、君子はその知らざる所に於て蓋闕如ず、名正しからざれば則ち言順はれず、言順はれざれば事成らず、事成らずんば禮樂興らず、禮樂興らずんば則ち刑罰中らず、刑罰中らずんば則ち民手足を措く所なし、故に君子名づくれば必ず言ふべきなり、言へば必ず行ふべきなり、君子は其言に於て苟くする所なきのみ。



四、樊遲請學稼、子曰、吾不如老農、請學爲圃、子曰、吾不如老圃、樊遲出、子曰、小人哉、樊遲須也、上好禮則民莫敢不敬、上好義則民莫敢不服、上好信則民莫敢不用情、夫如是則四方之民襁負其子而至矣、焉用稼、

○請學とは教へ給へと問ふ意、

五、子曰、誦詩三百、授之以政不達、使於四方不能專對、雖多亦奚以爲、

○達は曉る意、

六、子曰、其身正、不令而行、其身不正、雖令不從、

七、子曰、魯衛之政兄弟也、

八、子謂衛公子蒯、善居室、始有曰、苟合矣、少有曰、苟完矣、富有曰、苟美矣、

○合は足と同意、

九、子適衛、冉子僕、子曰、庶矣哉、冉有曰、既庶矣、又何加焉、曰富之、曰既富矣、又何加焉、曰教之、

○冉子、唐石經冉有に作る、

一〇、子曰、苟有用我者、期月而已可也、三年有成、

四、樊遲稼を請學ふ、子曰く、吾老農に如かず。圃を爲ることを請學ふ、子曰く、吾老圃に如かず。樊遲出づ。子曰く、小人なるかな樊遲や、上禮を好むときは則ち民敢て敬せざるなく、上義を好むときは、則ち民敢て服せざるなく、上信を好むときは、則ち民敢て情を用ゐざるなし、夫れ是の如くなれば則ち四方の民その子を襁負して至らむ、焉ぞ稼を用ゐむ。

五、子曰く、詩三百を誦するも、これに授くるに政を以てして「民情を」達らず、四方に使して專對する能はずんば、多しと雖ども亦奚以爲む。

六、子曰く、其身正しきときは令せざるも行はれ、其身正しからざるときは、令すと雖も從はれず。

七、子曰く、魯衛の政は兄弟なり。

八、子衛の公子蒯を謂る、善く室（家財）を居ふ、始めて有（富）ときは苟に合（足）りといひ、少しく有むときは苟に完るといひ、富に有むときは苟に美しといへり。

九、子衛に適けるとき冉有僕たり。子曰く、庶かな（衛人）。冉有曰く、既に庶し、又何をか加へむ。曰く富さむ。曰く、既に富めり、又何をか加へむ。曰く、教へむ。

一〇、子曰く、苟に我を用ゐる者あらば、期月のみなるも可なり、三年ならば成すあらむ。



- 一一、子曰、善人爲邦百年、亦可以勝殘去殺矣、誠哉是言也、
- 一二、子曰、如有王者、必世而後仁、
- 一三、子曰、苟正其身矣、於從政乎何有、不能正其身、如正人何、
- 一四、冉子退朝、子曰、何晏也、對曰、有政、子曰、其事也、如有政、雖不吾以、吾其與聞之、

- 一五、定公問、一言而可以興邦有諸、孔子對曰、言不可以若是、其幾也、人之言曰、爲君難、爲臣不易、如知爲君之難也、不幾乎一言而興邦乎、曰、一言而可喪邦有諸、孔子對曰、言不可以若是、其幾也、人之言曰、予無樂乎爲君、唯其言而讒莫予違也、如其善而莫之違也、不亦善乎、如不善而莫之違也、不幾乎一言而喪邦乎、

○唐石經可の字なし、皇疏本可以の二字あり、文選東京賦注此句を引く可以喪邦乎に作る、  
○唐石經樂の字なし、孔注によれば樂の字あるものは、

一一、子曰く、善人邦を爲むること百年ならば亦以て殘に勝ち殺を去るべしと、誠なるかな是の言。

一二、子曰く、如し王者あらば必ず世（三十年）にして後仁ならむ。

一三、子曰く、苟に其身を正しくせば政に従ふに於て何か有らむ、其身を正しくする能はざれば如何ぞ人を正しくせむ。

一四、冉子朝より退く。子曰く何ぞ晏き。對へて曰く、政ありつ。子曰く、其は事（臣の教令）ならむ、もし政（君の政令）あらば、吾以られずと雖も「猶大夫たり」吾それ興かり聞かむ。

一五、定公問ふ、一言にして以て邦を興すべきものありや。孔子對へて曰く、言は以て是の若きものあるべからざるも、其（殆）幾（近）ものあり。人の言に曰く、君たることは難く、臣たることも易からずと、如し君たることの難きを知らば一言にして邦を興すに幾からずや。曰く、一言にして邦を喪すべきものありや。孔子對へて曰く、言は以て是の若きものあるべからざるも、其幾きものあり。人の言に曰く、予君たることを樂しむなし、唯その言ひて予に違ふものなきを樂しむなりと、もしそれ善して違ふものなきときは亦善からずや、もし善からずして違ふものなきときは、一言にして



一六、葉公問政、子曰、近者悦、遠者來、

○唐石經葉を莖に作り悦を説

一七、子夏爲莒父宰、問政、子曰、毋欲速、毋見小利、欲速則不達、見小

○唐石經毋を無に作る、

利則大事不成、

一八、葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之、孔子曰、吾

○唐石經、莖、

黨之直者異於是、父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣、

○釋文云、躬、鄭本弓に作る、弓は人名、弓といふ正直者なり、

一九、樊遲問仁、子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄、不可棄也、

○此章、衛靈公篇子張問行章と相類す、此章仁の字或は

二〇、子貢問曰、何如斯可謂之士矣、子曰行己有恥、使於四方不辱君

○唐石經、棄を弁に作る、不可棄は所棄と同義、

命、可謂士矣、曰、敢問其次、曰、宗族稱孝焉、鄉黨稱悌焉、曰、敢

○唐石經、弟、

問其次、曰、言必信、行必果、硜硜然小人也、抑亦可以爲次矣、曰、

○邢疏本也を哉に作る、

今之從政者何如、子曰、噫、斗筭之人何足筭也、

○唐石經、筭を算に作る、釋文、算一本筭に作る、此本

一本と合す、按ずるに筭は筭壽の意、算は算數の意、此章算に作るを正となす、

邦を喪ぼすに幾からずや。

一六、葉公政を問ふ、子曰く、近き者説（悦）ぶときは遠き者來らむ。

一七、子夏莒父の宰となり、政を問ふ。子曰く、速にせむと欲するなかれ、小利を見ることなかれ、速にせむと欲するときは則ち達せず、小利を見るときは則ち大事成らず。

一八、葉公孔子に語つて曰く、吾黨に直躬といふものあり、その父羊を攘みて、子之を證はせり。孔子曰く、吾黨の直きは是れに異なり、父は子のために隠し、子は父のために

隠して、直きことその中にあり。

一九、樊遲仁（行）を問ふ。子曰く、居處恭しく、事を執（行）ひて敬み、人に與（交）りて忠あるときは夷狄に之くと雖も棄てられざるなり。

二〇、子貢問ひて曰ふ、何如なるをか、斯れ士といふべき。子曰く己を行ひて恥づるあり、四方に使用して君命を辱しめざる、士といふべし。曰く、敢て其次を問ふ。曰く、宗族は孝を稱し、郷黨は弟（悌）を稱する〔其次といふべし〕。曰く、敢て其次を問ふ。曰く、言は必ず信あらむとし、行は必らず果さむとするは、硜硜然として小人なるも、抑（然）ども亦以て次となすべからむ。曰く、今の政に従ふ者は何如。子曰く、噫、斗筭の人（小さき人物）何ぞ算るに足らむ。



二一、子曰、不得中行而與之、必也狂狷乎、狂者進取、狷者有所不爲也、  
二三、子曰、南人有言、曰、人而無恆、不可以作巫醫、善夫、不恆其德、  
或承之羞、子曰、不占而已矣、

二三、子曰、君子和而不同、小人同而不和、

二四、子貢問曰、鄉人皆好之何如、子曰、未可也、鄉人皆惡之何如、子  
曰、未可也、不如鄉人之善者好之、其不善者惡之、

二五、子曰、君子易事而難悅也、悅之不以道不悅也、及其使人也器之、

小人難事而易悅也、悅之雖不以道悅也、及其使人也求備焉、

二六、子曰、君子泰而不驕、小人驕而不泰、

二七、子曰、剛毅木訥近仁、

二八、子路問曰、何如斯可謂之士矣、子曰、切切悫悫怡怡如也、可謂士

○孟子盡心下孔子の語を引く  
中行を中道に作り狂狷を狂  
狷に作る、道行同義狷狷同  
音相通、

○禮記緇衣篇此語をのす作巫  
醫を爲卜筮に作る、巫醫は  
古占筮を掌る、故に作巫醫  
は爲卜筮と同意、

○唐石經、悅を説に作る、

○切切は勸競の貌、悫悫は又  
悫悫に作る、謙順の貌、怡  
怡は、熙熙と同義、和協の  
貌、

二一、子曰く、中行（中正の道をふむ人）を得て之に與（交）らざるときは、必ずや狂狷か。

狂者は進みて取り、狷者は爲ざる所あるなり。

二二、子曰く、南人言へるあり、曰く、人にして恆なきときは、巫醫を作て「卜筮せしむ」  
べからずと、善いかな「この言」。「易に云く」其徳を恆にせざれば、或（常）に羞  
を承くと、子曰く、「恆なき人は、易も」占「驗」不のみ。

二三、子曰く、君子は和して同せず、小人は同じて和せず。

二四、子貢問ひて曰く、郷人皆好みするときは何如。子曰く、未だ可ならず。郷人皆惡むと  
きは何如。子曰く、未だ可ならず。郷人の善き者は好みし、其善からざる者は惡まむ  
には如かじ。

二五、子曰く、君子は事へ易くして説（悦）がたし。説ばしむるに道を以てせざれば説ば  
ざるも、其人を使ふに及びては器のまゝにす。小人は事へがたくして説ばし易し。説  
ばしむるに道を以てせざるも説べども、其人を使ふに及びては備らむことを求む。

七 二六、子曰く、君子は泰にして驕らず、小人は驕りて泰ならず。

卷 二七、子曰く、剛（無欲）と毅（果敢）と木（質樸）と訥（遲鈍）とは仁に近し。

139 二八、子路問ひて曰く、何如なるをか斯れ士といふべき。子曰く、切切・悫悫・怡怡如たる、



矣、朋友切切偲偲、兄弟怡怡如也、  
二九、子曰、善人教民七年、亦可以即戎矣、  
三〇、子曰、以不教民戰、是謂棄之、

○唐石經本、敦煌鄭往本案、

論語憲問第十四

何晏集解 凡四十七章

- 一、憲問恥、子曰、邦有道穀、邦無道穀恥也、
- 二、剋伐怨欲不行焉、可以爲仁矣、子曰、可以爲難矣、仁則吾不知也、
- 三、子曰、士而懷居、不足以爲士矣、
- 四、子曰、邦有道危言危行、邦無道危行言遜、
- 五、子曰、有德者必有言、有言者不必有德、仁者必有勇、勇者不必有仁、

○史記此章を引く憲を子思に作る、蓋し子思は原憲の字、穀とは祿なり祿を食むをいふ、  
○史記此章を引く、上に子思曰の三字を冠し、可以爲仁矣の矣の字乎に作る、蓋し、又以て原憲の問となす也、矣乎同義、  
○唐石經史記剋克に作る、  
○唐石經孫、孟子趙注及後漢書注引皆遜に作る、此本と同じ、

士といふべし。朋友には切切偲偲たるべし、兄弟には怡怡如たるべし。

- 二九、子曰く、善人民を教ふる七年ならば亦以て戎に即かしむべし。
- 三〇、子曰く、教へざる民を以て戰はしむる、是れ之を棄つといふ。

論語憲問第十四

凡四十七章

- 一、〔原〕憲恥を問ふ。子曰く、邦道あるときは穀ろくはむ（食祿）べし、邦道なきとき穀ろくはむは恥なり。
- 二、〔原憲又問ふ〕剋（勝）伐（矜）怨（忌）欲（貪欲）行はれざる以て仁となすべきか。子曰く、以て難しとなすべし、仁は則ち吾知らざるなり。
- 三、子曰く、士にして居を懷おもふは、以て士となすに足らず。
- 四、子曰く、邦道あるときは言を危たふ（正）しくし行を危たふしくす、邦道なきときは行を危しくして言は孫したか（順）ふ。
- 五、子曰く、徳あるものは、必ず言あり、言あるものは必ずしも徳あらず、仁者は必ず勇



六、南宮适問於孔子曰、羿善射、奭盪舟、俱不得其死然、禹稷躬稼而

有天下、夫子不答、南宮适出、子曰、君子哉若人、尙德哉若人、

七、子曰、君子而不仁者有矣夫、未有小人而仁者也、

八、子曰、愛之能勿勞乎、忠焉能勿誨乎、

九、子曰、爲命卑謹草創之、世叔討論之、行人子羽脩飾、東里子產潤色之、

一〇、或問子產、子曰、惠人也、問子西、曰、彼哉、彼哉、問管仲、曰、人

也、奪伯氏駢邑三百、飯蔬食、沒齒無怨言、

一一、子曰、貧而無怨難、富而無驕易、

一二、子曰、孟公綽爲趙魏老則優、不可以爲滕薛大夫也、

一三、子路問成人、曰、若臧武仲之智、公綽之不欲、卞莊子之勇、冉求

○釋文、适一本括に作る、史記弟子傳一本と同じ、  
○然は焉と音近くして通用、

○能而古通用、

○唐石經、卑を紳に作り脩飾の下之の字あり、紳謹左傳に見ゆ、風俗通卑謹に作り、漢書卑謹に作る、並同音假借、

○馬融云、彼哉彼哉とは稱するに足るなき也、

○履軒云、人上一字を脱す、按ずるに說苑善說篇に孔子子路の間に答へて管仲を大人也と評すれば恐らく人上大の字を脱するなるべし、

○疏、唐石經疏に作る、  
○唐石經、曰の上子の字あり、智知に作る、

あり、勇者は必ずしも仁あらず。

六、南宮适孔子に問ひて曰く、羿は射を善くし、奭は舟を盪せるも、俱に、その死を得ず、

禹と稷とは躬ら稼げるも天下を有てり、「豈尙ぶ所徳にありて力にあらざるか」。夫子

答へず。南宮适出づ。子曰く、君子なるかな。若き人、徳を尙べるかな。若き人。

七、子曰く、君子にして不仁なるものあり、未だ小人にして仁なる者あらざるなり。

八、子曰く、愛して勞(憂)ふるなからむや、忠(誠)ありて誨ふるなからむや。

九、子曰く、「鄭國の」命を爲るや、卑謹これを草創し、世叔これを討論し、行人の子羽これを脩飾し、東里の子産これを潤色す、「故に敗事あること鮮し」。

一〇、或ひと子産を問ふ、子曰く惠人なり。子西を問ふ、曰く彼哉彼哉「何ぞ稱するに足らむ」。管仲を問ふ、曰く「大」人なり、伯氏の駢邑三百を奪ひ、蔬食を飯ひて齒を沒はらしめて、怨言なかりき。

一一、子曰く、貧くして怨むなきは難く、富みて驕るなきは易し。

七 一二、子曰く、孟公綽は趙魏の老(家臣)と爲さば則ち優ならむも、以て滕薛の大夫には爲すべからず。

一三、子路成人を問ふ。子曰く、臧武仲の智と公綽の不欲と卞莊子の勇と冉求の藝との若き、



之藝、文之以禮樂、亦可以爲成人矣、曰、今之成人者、何必然、見利思義、見危授命、久要不忘平生之言、亦可以爲成人矣、

一四、子問公叔文子於公明賈、曰、信乎、夫子不言不笑不取乎、公明賈對曰、以告者過也、夫子時然後言、人不厭其言、樂然後笑、人不厭其笑、義然後取、人不厭其取、子曰、其然、豈其然乎、

一五、子曰、臧武仲以防求爲後於魯、雖曰不要君、吾不信也、

一六、子曰、晉文公譎而不正、齊桓公正而不譎、

一七、子路曰、桓公殺公子糾、召忽死之、管仲不死、曰未仁乎、子曰、桓公九合諸侯、不以兵車、管仲之力也、如其仁、如其仁、

一八、子貢曰、管仲非仁者與、桓公殺公子糾、不能死、又相之、子曰、管

○久要は舊約也、久と舊と要と約と音近くして通借す、  
○禮記雜記篇に公羊賈といふ人見ゆ、羊と明と古音相近ければ公明賈と同人なるべし、  
○乎、群書治要になし、恐らくは衍字、  
○唐石經也の字なし、論衡儒增篇此章を引く也の字あり、此本と同じ、

○如猶奈のごとし、又如何と同義、此章管仲の功績を稱して而も其仁を許さざる也、

之を文るに禮樂を以てすれば、亦以て成人となすべし。曰く、今の成人は何ぞ必ずしも然（如是）せむ、利を見ては義を思ひ、危を見ては命を授げ、久要（舊約）に平生の言を忘れざれば亦以て成人となすべし。

一四、子公叔文子を公明賈に問ひて曰く、信なるか、夫子は言はず笑はず取らずと。公明賈對へて曰く、以て告げし者の過なり、夫子は時ありて然して後に言ふ、人その言ふを厭はざるなり、樂みて然して後に笑ふ、人その笑ふを厭はざるなり、義ありて然して後に取る、人その取るを厭はざるなり。子曰く、それ然り、豈それ然らむや。

一五、〔臧武仲罪あり邾に奔り、邾より防にゆき、防に據つて其後を立てむことを求む、乃ち其異母兄臧爲を立てて後となす〕。子曰く、臧武仲防を以て後を爲（立）むことを魯に求む、君を要せずといふと雖も、吾は信ぜざるなり。

一六、子曰く、晉の文公は譎つて正しからず、齊の桓公は正しくして譎らず。

一七、子路曰く、桓公公子糾を殺せるとき、召忽は死せしも管仲は死せず、未だ仁ならずといはむか。子曰く、桓公諸侯を九合して、兵車を以てせざりしは管仲の力なり、〔然れども〕如ぞそれ仁ならむ、如ぞそれ仁ならむ。

一八、子貢曰く、管仲は仁者にあらざるか、桓公公子糾を殺せるとき、死する能はずして又



仲相桓公霸諸侯、一匡天下、民到于今受其賜、微管仲、吾其被髮左衽矣。豈若匹夫匹婦之爲諒也。自經於溝瀆而莫之知也。

一九、公叔文子之臣大夫僎、與文子同升諸公、子聞之曰、可以爲文矣、

二〇、子曰、衛靈公之無道也、康子曰、夫如是、奚而不喪、孔子曰、仲

叔圍治賓客、祝鮀治宗廟、王孫賈治軍旅、夫如是、奚其喪、

二一、子曰、其言之不怍、則圍爲之難也、

二二、陳成子殺簡公、孔子沐浴而朝、告於哀公曰、陳恆殺其君、請討之、

公曰、告夫二三子、孔子曰、以吾從大夫之後、不敢不告也、君曰、

告夫二三子者、之二三子告、不可、孔子曰、以吾從大夫之後、不

敢不告也、

二三、子路問事君、子曰、勿欺也而犯之、

○被髮、漢書終軍傳編髮に作る、注云編讀て辮となすと、蓋し被編辮同音相通ず、辮髮左衽は夷狄の俗、  
○衽釋文衽に作る、  
○若の字唐石經旁添、  
○唐石經曰を言に作る、釋文云、子曰一本子言に作る、  
○唐石經久の字なし、此本久の字ある恐らくは衍、  
○唐石經、其の字なく難也を也難に作る、後漢書皇甫規傳引其の字あり、此本と同じ、  
○唐石經殺を弒に作る、釋文云、弒一本亦殺に作る、  
○邢本二三子皆三子に作る、唐石經たゞ初二三子に作り後三子に作る、釋文云、之三子一本二三子に作る非、  
○此章子張篇第十章信ぜられて後諫むといふと同義、

之を相けたり。子曰く、管仲桓公を相けて諸侯に霸たらしめ天下を一匡し、民今に至

るまでその賜を受く、管仲微りせば、吾それ被髮左衽せむ、豈匹夫匹婦の諒を爲し、

自ら溝瀆に經れて知らるるなきが若くせむや。

一九、公叔文子の臣大夫僎、文子と與に同じく諸公に升れり。子之を聞いて曰く、以て文と

なすべし。

二〇、子、衛の靈公の無道をいふ。康子曰く、それはの如くんば奚而(何爲)喪びざる。孔

子曰く、仲叔圍賓客を治め、祝鮀宗廟を治め、王孫賈軍旅を治む、それはの如し、奚

ぞそれ喪びむ。

二一、子曰く、その言ふに怍ざるときは、則ち爲すに難し。

二二、陳成子簡公を弒す。孔子沐浴して朝し、哀公に告げて曰く、陳恆其君を弒せり、請ふ

これを討たむと。公曰く、夫三子(三卿)に告げよと。孔子曰く、吾大夫の後に從へ

るを以て敢て告げずんばあらざるなり、「然るに」君は夫三子の者に告げよと曰へりと

て、三子に之きて告ぐ。可かず。孔子曰く、吾大夫の後に從へるを以て敢て告げずん

ばあらざるなりと。

二三、子路君に事ふることを問ふ。子曰く、欺なかれ、而して〔後〕之を犯めよ。



二四、子曰、君子上達、小人下達、

二五、子曰、古之學者爲己、今之學者爲人、

二六、蘧伯玉使人於孔子、孔子與之坐而問焉、曰夫子何爲、對曰、夫子

欲寡其過而未能也、使者出、子曰、使乎使乎、

二七、子曰、不在其位、不謀其政、

二八、曾子曰、君子思不出其位、

二九、子曰、君子恥其言之過其行、

三〇、子曰、君子道者三、我無能焉、仁者不憂、智者不惑、勇者不懼、子

貢曰、夫人自導也、

三一、子貢方人、子曰、賜也賢乎我夫、我則不暇、

三二、子曰、不患人之不己知、患己無能也、

三三、子曰、不逆詐、不億不信、抑亦先覺者、是賢乎、

○此章禮記表記篇の事君不下達と同義、

○唐石經之を而に作り句末也の字なし、

○孟子趙注此語を引く君子之道に作る、

○唐石經、智を知に作り導を道に作る、

○釋文云、鄭本方を謗に作る、

○我、唐石經哉に作る、此本恐らくは誤、

○唐石經、己無を其不に作る、

○唐石經、億を億に作る、

二四、子曰く、「君に事ふるに」君子は上（徳）をもつて達（通）し、小人は下（財）をもつて達（通）す。

二五、子曰く、古の學者は己の爲めにし、今の學者は人の爲めにす。

二六、蘧伯玉人を孔子に使せしむ。孔子これと與に坐して問ひて曰く、夫子は何をかする。

對へて曰く、夫子は過を寡くせむと欲すれども未だ能はざるなり。使者出づ。子曰く、

「善き」使なるかな「善き」使なるかな。

二七、子曰く、其位に在らざれば其政を謀らず。

二八、曾子曰く、君子は思ふこと其位より出でず。

二九、子曰く、君子は其言の其行に過ぐるを恥づ。

三〇、子曰く、君子の道三あり、我これを能するなし。仁者は憂へず、智者は惑はず、勇者

は懼れず。子貢曰く、「これ」夫子自ら道へるなり。

三一、子貢人を方（正）す。子曰く、賜は賢（勞）むるかな、我は則ち「人を正すに」暇あ

らず、「たゞ自ら正さむと欲するのみ」。

七 卷 三二、子曰く、人の己を知らざるを患へず、己の能なきを患へよ。

三三、子曰く、詐かるるを逆はず、信ぜられざるを億（憶）らざるも、抑亦先づ「人の情を」



三四、微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與、無乃爲佞乎、孔子對曰、非敢爲佞也、疾固也、

○釋文云、何爲是一本たゞ何に作り、鄭本何是に作る、

三五、子曰、驥不稱其力、稱其德也、

三六、或曰、以德報怨何如、子曰、何以報德、以直報怨、以德報德、

三七、子曰、莫我知也夫、子貢曰、何爲其莫知子也、子曰、不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎、

三八、公伯寮愬子路於季孫、子服景伯以告曰、夫子固有惑志於公伯寮

圃、吾力猶能肆諸市朝、子曰、道之將行也與、命也、道之將廢也

與、命也、公伯寮其如命何、

三九、子曰、賢者避世、其次避地、其次避色、其次避言、

○史記弟子傳引兩句末ともに也與の二字なし、也與は蓋し助詞なるべし、  
○唐石經、避辟に作る、  
○呂氏春秋先識覽注引避色を避人に作る、微子篇第六章避世避人の語あれば避人に作る是に似たり、

覺る者は、是れ賢なるか。

三四、微生畝、孔子に謂つて曰く、丘は何爲ぞ、是れく栖栖する者ぞ、無乃佞を爲さむとするか。孔子對へて曰く、敢て佞を爲さむとするにあらず、〔天下の〕固なるを疾めばなり。

三五、子曰く、驥は其力を稱せず、其徳を稱するなり。

三六、或ひと曰く、徳を以て怨に報ぜば何如。子曰く、何を以てか徳に報ぜむ、直きを以て怨に報じ、徳を以て徳に報ぜよ。

三七、子曰く、我を知るなきかな。子貢曰く、何爲ぞそれ子を知るなからむ。子曰く、〔我は〕天をも怨みず、人をも尤めず、下〔人事を〕學びて上〔天命に〕達す、我を知るものはそれ天のみか。

三八、公伯寮子路を季孫に愬ふ。子服景伯以て〔孔子に〕告げて曰く、夫子〔季孫〕固より公伯寮に志を感せるあり、吾力猶能く〔子路の罪なきを辯じて季孫をして伯寮を誅し〕これを市朝に肆さしめむと。子曰く、道の行はれむとするも命なり、道の廢れむとするも命なり、公伯寮それ命を如何せむ。

三九、子曰く、賢者は世を避け〔天下道なければ隠る〕、其次は地を避け〔亂邦を去りて治邦



四〇、子曰、作者七人矣、

四一、子路宿於石門、石門晨門曰、奚自、子路曰、自孔氏、曰、是知其不可而爲之者與、

○唐石經、石門の二字を重ねず、

四二、子擊磬於衛、有荷簣而過孔氏之門者、曰、有心哉擊磬乎、既而曰、鄙哉、硜硜乎、莫己知也斯己而已矣、深則厲、淺則揭、子曰、果哉、末之難矣、

○簣、唐石經黃に作る、  
○史記世家引、既而曰鄙哉の  
五字なし、

四三、子張曰、書云、高宗諒陰三年不言、何謂也、子曰、何必高宗、古之

○諒陰また諒闇に作る、

人皆然、君薨百官總己以聽於冢宰三年、

四四、子曰、上好禮則民易使也、

四五、子路問君子、子曰、脩己以敬、曰如斯而已乎、曰脩己以安人、曰

に入る)、其次は人を避け(悪人を遠ざかる)、其次は言を避く(悪言あれば乃ち去る)。

四〇、子曰く、作者七人あり。

四一、子路石門に宿る、晨門(守門者)曰く、奚よりせるか。子路曰く、孔氏よりせり。曰く、是れその「爲む」べからざるを知りつゝ、「強ひて」これを爲めむとする者か。

四二、子磬を衛に撃つ。黃を荷ひて孔氏の門を過ぐる者あり、曰く、心あるかな磬を撃てること。既にして曰く、鄙(固陋)なるかな、「その音」硜硜乎たり、「世」己を知るなれば斯ち己あるのみ「何ぞ世を憂へむ」、[詩に云く]「深きときは則ち厲(涉)るべし淺きときは則ち掲ぐべし」と、「世道あるときは見るべし、道なきときは隠れむのみ」。子曰く、果かな「かの人の世をすつること。此の如くするは亦」難きこと末(無)きなり。

四三、子張曰く、書に高宗「諒陰三年言はず」と云ふは何の謂ぞや。子曰く、何ぞ必ずしも高宗のみならむ、古の人は皆然(如此)し、君薨するときは百官己(の職事)を總て以て冢宰に聽くこと三年、「喪畢りて後王自ら政を聽く」。

四四、子曰く、上禮を好むときは則ち民使ひ易し。

四五、子路君子を問ふ、子曰く、「君子は」己を脩むるに敬を以てす。曰く、斯の如きのみか。



如斯而已乎、曰脩己以安百姓、脩己以安百姓、堯舜其猶病諸、

四六、原壤夷俟、子曰、幼而不遜悌、長而無述焉、老而不死、是爲賊、以杖叩其脛、

○邢本遜悌孫弟に作る、

四七、闕黨童子將命、或問之曰、益者與、子曰、吾見其居於位也、見其與先生竝行也、非求益者也、欲速成者也、

曰く己を脩めて以て人を安んず。曰く斯の如きのみか。曰く己を脩めて以て百姓を安んず、己を脩めて以て百姓を安んずるは、堯舜もそれ猶これを病かたし(難)とす。

四六、「孔子幼時の友」原壤夷うづくまり(踞)て「孔子」を俟まつ。子曰く、幼いよけなくして孫弟(遜悌)ならず、長じて述ほめら(稱述)るるなく、老いて死せず、是れ「世道の」賊(害)となす、とて杖を以て其脛はきを叩く。

四七、「孔子闕黨に居る」、闕黨の童子命とりつぎを將おこなふ。或ひと問ひて曰く、益す(進)まむ者ひとか。子曰く、吾その「成人の」位(席)に居るを見たり、「又」先生(長者)と竝び行けるを見たり、益す(進)まむことを求むる者ひとにあらず、速に「人と」成らむことを欲する者ひとなり。



論語卷第八



論語衛靈公第十五 何晏集解 凡四十二章

- 一、衛靈公問陳於孔子、孔子對曰、俎豆之事則嘗聞之矣、軍旅之事未之學也、明日遂行、
- 二、在陳絕糧、從者病莫能興、子路愠見曰、君子亦有窮乎、子曰、君子固窮、小人窮斯濫矣、
- 三、子曰、賜也、汝以予爲多學而識之者與、對曰然、非與、曰、非也、予一以貫之、
- 四、子曰、由、知德者鮮矣、
- 五、子曰、無爲而治者、其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣、
- 六、子張問行、子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣、言不忠信、行

○陳、釋文陣に作り、史記世家引兵陳に作る、蓋し陣は陳の俗字、史記は陳の字を解して兵陳となすなるべし、

○糧、唐石經糧に作る、釋文、糧音糧、鄭本糧に作る、蓋し糧は糧の俗字、糧糧同義、

○唐石經汝を女に作る、

○子路篇第十九章參照、

論語衛靈公第十五 凡四十二章

- 一、衛靈公陳(陣)を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、俎豆の事は則ち嘗て聞けるも、軍旅の事は未だ學ばずと、明日遂に行(去)る。
- 二、「孔子」陳に在つて糧(糧)を絶つ、從者病みて興(起)つ能はず。子路愠り見えて曰く、君子も亦窮するあるか。子曰く、君子固より窮す、小人窮すれば斯ち濫(竊)む。
- 三、子曰く、賜よ、女(汝)予を以て多く學びて識れる者となすか。對へて曰く然り、非ざるか。曰く非らず、予一以て貫(行)ふ。
- 四、子曰く、由よ、徳を知れる者鮮し。
- 五、子曰く、無爲にして治めし者はそれ舜か、夫何をか爲さむや、己を恭くして正しく南面せるのみ。
- 六、子張〔令の〕行〔はるる所以〕を問ふ。子曰く、言忠信ありて行篤敬ならば、蠻貊の邦と雖も行はれむ、言忠信あらず行篤敬ならざれば州里と雖も行はれむや。立つと



不篤敬、雖州里行乎哉、立則見其參罔於前也、在輿則見其倚於衡也、夫然後行罔、子張書諸紳、

○唐石經然の字なし、此本然の字恐らく衍、

七、子曰、直哉史魚、邦有道如矢、邦無道如矢、君子哉蘧伯玉、邦有道則仕、邦無道則可卷而懷也、

○可は俗語の好に同じ、手ぎはよくとの意、

八、子曰、可與言而不與言、失人、不可與言而與言之、失言、知者不失人、亦不失言、

○邢本與下之の字あり、○言之、唐石經之言に作る、邢本同じ、徐幹中論此章を引く皆邢本に同じ、

九、子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁、

○唐石經、仁を人に作る、皇

一〇、子貢問爲仁、子曰、工欲善其事、必先利其器、居是邦也、事其大夫之賢者、友其士之仁者罔、

疏正義によるに仁に作るを是となす、

一一、顔淵問爲邦、子曰、行夏之時、乘殷之輅、服周之冕、樂則韶舞、放鄭聲遠佞人、鄭聲淫、佞人殆、

○釋文、輅一本路に作る、路は輅の假借字、

きは則ち其（忠信篤敬）の前に參（直）を見、輿に在るときは則ち其（忠信篤敬）の衡（車前の横木）に倚るを見る、夫れ然（如此）にして後行はれむ。子張（この語を聞きて）これを紳に書せり。

七、子曰く、直なるかな史魚、邦道あるときも矢の如く、邦道なきときも矢の如し。君子なるかな蘧伯玉、邦道あるときは仕へ、邦道なきときは可（好）卷（收）めて懷（歸）るなり。

八、子曰く、輿に言ふべくして輿に言はざるときは人を失ふ、輿に言ふべからずして輿に言ふときは言を失ふ、知者は人をも失はず、亦言をも失はず。

九、子曰く、志士仁人は生を求めて仁を害することなく、身を殺して仁を成すことあり。

一〇、子貢仁を爲さむことを問ふ。子曰く、工（工匠）その事を善くせむと欲するときはず先づその器を利（厲）ぐ、この邦に居るにはその大夫の賢なる者に事へ、その士の仁なる者を友とせよ。

一一、顔淵邦を爲めむことを問ふ。子曰く、夏の時を行ひ、殷の輅に乗り、周の冕を服し、樂は韶（舜の樂）舞（武即ち武王の樂）に則り、鄭聲を放ちて佞人を遠ざけよ。鄭聲は淫にして佞人は殆し。



- 一二、子曰、人爾無遠慮、必有近憂、
- 一三、子曰、已矣乎、吾未見好德如好色者也、
- 一四、子曰、臧文仲其竊位者與、知柳下惠之賢、而不與立也、
- 一五、子曰、躬自厚、而薄責於人、則遠怨矣、
- 一六、子曰、不曰如之何如之何者、吾未如之何也已矣、
- 一七、子曰、羣居、終曰言不及義、好行小慧、難矣哉、
- 一八、子曰、君子義以為質、禮以行之、遜以出之、信以成之、君子哉、
- 一九、子曰、君子病無能焉、不病人之不己知也、
- 二〇、子曰、君子疾沒世而名不稱焉、
- 二一、子曰、君子求諸己、小人求諸人、

○未、唐石經末に作る、末は無と同義、  
 ○釋文云、魯論慧を讀んで惠となす、今古論に従ふ、  
 ○釋文云、爲質一本君子義以爲質に作る、蓋し陸本子曰の下君子の二字なき也、此章末句君子哉とあれば章首君子の二字なきものは是に似たり、  
 ○遜、釋文唐石經ともに孫に作る、  
 ○此章は大學に君子有諸己而後求諸人とあると同義、先づ己を責めて人を責めざる意なり、

- 八二〇、子曰く、君子は世を沒(終)るも名の稱せられざるを疾む。
- 二一、子曰く、君子はこれを己に求め、小人はこれを人に求む。(君子は己を責め小人は人を責む)。

- 一二、子曰く、人にして遠慮なきときは必ず近憂あり。
- 一三、子曰く、已んぬるかな、吾未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を見ざるなり。
- 一四、子曰く、臧文仲はそれ位を竊める者か、柳下惠の賢を知れるも立(位)を與へざるなり。
- 一五、子曰く、躬自ら「責むること」厚くして、人を責むるに薄きときは、則ち怨を遠くべし。
- 一六、子曰く、如何せむ如何せむと曰はざる者は、吾如何ともするなきなり。
- 一七、子曰く、群居して終日言ふも義に及ばず、好んで小慧を行ふは難いかな「成すあること」。
- 一八、子曰く、「其行は」義以て質となして禮以て之を行ひ、「其言は」孫(遜)以て之を出し信以て之を成す、君子なるかな。
- 一九、子曰く、君子は能なきを病(患)ふ、人の己を知らざるを病へざるなり。
- 八二〇、子曰く、君子は世を沒(終)るも名の稱せられざるを疾む。
- 二一、子曰く、君子はこれを己に求め、小人はこれを人に求む。(君子は己を責め小人は人を責む)。



二二、子曰、君子矜而不爭、羣而不黨、

二三、子曰、君子不以言舉人、不以人廢言、

二四、子貢問曰、有一言而可以終身行者乎、子曰、其恕乎、己所不欲、勿施於人也、

二五、子曰、吾之於人也、誰毀誰譽、如有可譽者其有所試矣、斯民也三

代之所以直道而行也、

二六、子曰、吾猶及史之闕文也、有馬者借人乘之、今則亡矣夫、

二七、子曰、巧言亂德、小不忍亂大謀、

二八、子曰、衆惡之必察焉、衆好之必察焉、

二九、子曰、人能弘道、非道弘人也、

三〇、子曰、過而不改、是謂過矣、

三一、子曰、吾嘗終日不食、終夜不寢、以思無益、不如學也、

○唐石經行下之字あり章末也の字なし、

○唐石經可を所に作る、可所通用、

○後漢書韋彪傳注此章を引く斯下民也の二字なし、この

下馬融注によるに融見る所亦この二字なきに似たり、

○釋文則の字なし、唐石經このところを缺くもその字數

によれば又則の字なきに似たり、

○唐石經章末也の字なし、漢書董仲舒傳引あり、此本と同じ、

二二、子曰く、君子は矜なるも争はず、羣するも黨せず。

二三、子曰く、「言ある者必ずしも徳あらず、徳なき者も時に善言あり、故に」君子は言を以て人を擧げず、人を以て言を廢てず。

二四、子貢問ひて曰く、一言にして以て終身これを行ふべきものありや。子曰く、それ恕か、己の欲せざる所は人に施すこと勿れ。

二五、子曰く、我の人に於けるや、誰をか毀り、誰をか譽めむ、如し譽むべきものあらば、それ試むる所あらむ。斯れ「夏殷周」三代の、道に直（縁）りて行はれし所以なり。

二六、子曰く、吾猶「古の」史「疑はしきにあへば」文「字」を闕き「て以て知者を待ち」、  
「古の」馬を有てる者、「自ら調良能はざれば」人に借して乗らしむるを「見るに」及べり、今は則ち亡いかな。

二七、子曰く、巧言は徳を亂り、小さきこと忍ばざれば則ち大いなる謀を亂る。

二八、子曰く、衆之を惡むも必ず察し、衆之を好するも必ず察せよ。

八 二九、子曰く、人能く道を弘む、道人を弘むるにあらざるなり。

卷 三〇、子曰く、過ちて改めざる、これを過といふ。

165 三一、子曰く、吾嘗て終日食はず、終夜寝ねず、以て思ひしかども益なかりき、學ぶに如か



三二、子曰、君子謀道、不謀食、耕也餒在其中矣、學也祿在其中矣、君子憂道、不憂貧也、

三三、子曰、知及之、仁不能守之、雖得之必失之、知及之、仁能守之、不莊以莅之、則民不敬、知及之、仁能守之、莊以莅之、動之不以禮、未善也、

三四、子曰、君子不可小知、而可大受也、小人不可大受也、而可小知也、三五、子曰、民之於仁也、甚於水火、水火吾見蹈而死者矣、未見蹈仁而死者也、

三六、子曰、當仁不讓於師、

三七、子曰、君子貞而不諒、

三八、子曰、事君敬其事而後其食、

三九、子曰、有教無類、

○此章之字十一、皆民を指す、  
○莅、唐石經泣に作る、莅は泣の或體、

○徂徠云、此章用人の法をいふ、小知は之を小用する也、大受は之を大用するなり、

○邢本也の字なし、

○唐石經、此章、事君敬其事而後食其祿に作る、食とは俸祿の意なり、

ざるなり。

三二、子曰く、君子は道を謀まもひて食を謀まもはず、耕すも〔學まなばざれば〕餒うらその中にあり、學まなべば〔耕たがさざるも〕祿ろくその中にあり、〔故ゆに〕君子は道を憂うれへて貧を憂うれへず。

三三、子曰く、知は之（民）に及ぶも、仁もて之を守る能はざれば、これを得といへども必ず之を失ふ。知之（民）に及び仁能く之を守るも莊ちやう以て之に泣なまざれば則ち民は敬はず。知之（民）に及び、仁能く之を守り、莊ちやう以て之に泣なむも、之を動かすに禮を以てせざれば未だ善からざるなり。

三四、子曰く、君子は小知（用）すべからざるも、大受せしむべきなり。小人は大受せしむべからざるも、小知（用）すべきなり。

三五、子曰く、〔民は水火なければ生くべからず、然れども〕民の仁に於けるは水火よりも甚だし。水火は吾蹈んで死する者ひとを見るも未だ仁を蹈んで死する者ひとを見ざるなり。

三六、子曰く、仁にあに當りては師にも讓あらず。

八 三七、子曰く、君子は〔行〕貞たししれども〔言必まずしも〕諒まこと（小信）ならず。

卷 三八、子曰く、君に事つかふるには、其事わざを敬つみて其食（祿）を後にせよ。

167 三九、子曰く、教ありて類なし。（何如なる人も教育すれば皆善人たらしむべし）。



四〇、子曰、道不同、不相爲謀、

四一、子曰、辭達而已矣、

四二、師冕見、及階、子曰、階也、及席、子曰、席也、皆坐、子告之曰、某在斯、某在斯、師冕出、子張問曰、與師言之道與、子曰、然、固相師之道也、

○鹽鐵論云、孔子曰治道不同者不相與謀と、蓋し此章の異文、爲と與と古通用、

○師は樂師、冕はその名、古の樂師は皆盲目の人を用ふ、師冕も亦盲者なり、故に之を案内してその位置を言ひきかすなり、

論語季氏第十六

何晏集解 凡十四章

一、季氏將伐顓臾、冉有季路見於孔子曰、季氏將有事於顓臾、孔子曰、求、無乃爾是過與、夫顓臾、昔者先王以爲東蒙主、且在邦域之中矣、是社稷之臣也、何以爲伐也、冉有曰、夫子欲之、吾二臣者、皆不欲也、孔子曰、求、周任有言曰、陳力就列、不能者止、危而不持、顛而不扶、則將焉用彼相矣、且爾言過矣、虎兕出於柙、

○釋文云、邦或は封に作る、邦封音義同じ、

○何以爲伐也諸本何以伐爲に作る、最後の爲の字は助詞、

○烈、唐石經列に作る、列とは位なり、

○釋文云、匣一本柙に作る、此本一本に同じ、

四〇、子曰く、道同じからざれば相爲に謀らず。

四一、子曰く、辭は「意を」達するのみ、「文飾を要せざるなり」。

四二、師冕見ゆ、階に及る、子曰く、階なりと。席に及る、子曰く席なりと。皆坐す、子これに告げて曰く、某は斯にあり、某は斯にありと。師冕出づ、子張問ひて曰く、「かくの如くするは」師と言る道かと。子曰く、然り、固に師を相く道なりと。

論語季氏第十六

凡十四章

一、季氏將に顓臾を伐たむとす、冉有季路孔子に見えて曰く、季氏將に顓臾に事あらむとす。孔子曰く、求よ、無乃爾是(寔)過てるか、夫れ顓臾は、昔者先王以て東蒙の主と爲したまひ、且つ邦域の中にあり、是れ社稷の臣なり、何を以てか伐たむや。冉有曰く、夫子(季氏)これを欲す、吾二臣は皆欲せざるなり。孔子曰く、求よ、周任言へるあり、曰く力を陳べて列(位)に就き、能はざれば止むと、危けれども持たず、顛へるも扶ざれば則將焉ぞ彼の相と用(爲)む、且つ爾の言過てり、虎兕柙を出で



龜玉毀櫝中、是誰之過與也、冉有曰、今夫顓臾固而近於費、今不取、後世必爲子孫憂、孔子曰、求、君子疾夫舍曰欲之而必更爲之辭、丘也聞、有國有家者、不患寡而患不均、不患貧而患不安、蓋均無貧、和無寡、安無傾、夫如是、故遠人不服、則修文德以來之、既來之則安之、今由與求也、相夫子遠人不服、而不能來也、邦分崩離析而不能守也、而謀動干戈於邦內、吾恐季孫之憂、不在於顓臾、而在蕭牆之內也、

二、孔子曰、天下有道、則禮樂征伐自天子出、天下無道、則禮樂征伐自諸侯出、自諸侯出、蓋十世希不失矣、自大夫出、五世希不失矣、陪臣執國命、三世希不失矣、天下有道、則政不在大夫、天下有道、則庶人不議、

○唐石經毀下於の字あり、  
○釋文後世の二字なし、云一本後世必に作ると、此一本に同じ、  
○春秋繁露度制篇、及魏書張普惠傳引、不患貧而患不均に作る、愈熾曰ふ、今本寡貧の二字傳寫互易當に不患貧而患不均、不患寡而患不安に改むべし、  
○釋文云、邦内鄭本封内に作る、  
○釋文顓臾の上於の字なし、  
○漢石經蕭牆の上於の字あり、包咸周氏本唐石經及び此本皆なし、

て龜玉櫝の中に毀るゝとき、是れ誰の過ぞや。冉有曰く、今夫顓臾は固（堅固）して費（季氏の邑）に近し、今取らずんば後世必ず子孫の憂とならむ。孔子曰く、求よ、君子は夫之を欲すといふを捨て必ずこれが辭（口實）を爲すものを疾む、丘は聞けり、國を有ち家を有つ者は〔財の〕貧しきを患へずして均（平等）からざるを患ふ、〔民の〕寡きを患へずして安んぜざるを患ふと、蓋し〔財〕均しきときは貧ことなく、〔民〕和すれば寡ことなく、安んずれば傾くことなし、夫れ是の如し、故に遠人服せざるときは則ち文徳を修めて以て之を來け、既に來くときは則ち之を安んず、今、由と求とは夫子を相けて遠人服せざるも來くる能はず、邦分崩離析するも守る能はず、而して干戈を邦内に動かさむことを謀る、吾恐る、季孫の憂は顓臾にあらざして蕭牆の内にあらむことを。

二、孔子曰く、天下道あるときは則ち禮樂征伐天子より出づ、天下道なきときは則ち禮樂征伐諸侯より出づ。諸侯より出づるときは、蓋し十世にして失びざる希なし、大夫より出づるときは、五世にして失びざる希し、陪臣國命を執るときは、三世にして失びざる希し。天下道あるときは則ち政大夫にあらず、天下道あるときは則ち庶人議せず。



三、孔子曰、祿之去公室五世矣、政逮大夫四世矣、故夫三桓之子孫微矣、

四、孔子曰、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣、友便僻、友善柔、友便佞、損矣、

五、孔子曰、益者三樂、損者三樂、樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友、益矣、樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損矣、

六、孔子曰、侍於君子有三愆、言未及之而言謂之躁、言及之不言謂之隱、未見顔色而言謂之瞽、

七、孔子曰、君子有三戒、少之時、血氣未定、戒之在色、及其壯也、血氣方剛、戒之在鬪、及其老也、血氣既衰、戒之在得、

○逮下邢本於の字あり、唐石經このところを缺損、その字數を推すにまた於の字あるべし、此本なし、正平版同じ、  
○唐石經辟、辟同義、便僻は人の忌む所をさけてへつらふ意、善柔は面柔者、便佞は辯佞者、

○愆とは過なり、  
○釋文云、魯論躁を讀んで傲となす、荀子勸學篇亦傲に作る、  
○言及之の下唐石經而の字あり、

三、〔魯の東門襄仲、文公の子赤を殺して宣公を立て、より、政大夫にあり、爵祿君より出でず、定公に至つて五世なり〕。孔子曰く、祿の公室を去る五世なり、政大夫に逮ぶ四世なり、故に夫三桓の子孫は微（衰）へたり。

四、孔子曰く、益するものに三の友、損するものに三の友あり。直（直言者）を友とし、諒（忠信の人）を友とし、多聞を友とするは益なり。便僻（便佞）を友とし、善柔（令色者）を友とし、便佞（便佞）を友とするは損なり。

五、孔子曰く、益あるものに三の樂、損するものに三の樂あり。禮樂を節することを樂み、人の善をいふことを樂み、賢友多きを樂むは益なり。驕樂を樂み、佚遊を樂み、宴樂を樂むは損なり。

六、孔子曰く、君子に侍るに三の愆（過）あり。言及ばざるべきに言ふ、これを躁（傲）といひ、言及ぶべきに言はざる、これを隱といひ、「人の」顔色を見ずして言ふ、これを瞽といふ。

七、孔子曰く、君子に三の戒あり、少き時は血氣未だ定らず、戒むること色にあり、其壯なるに及びては、血氣方に剛し、戒むること鬪にあり、其老いるに及びては血氣既に衰ふ、戒むること得（利得）にあり。



八、孔子曰、君子有三畏、畏天命、畏大人、畏聖人之言、小人不知天命而不畏也、狎大人、侮聖人之言、

九、孔子曰、生而知之者上也、學而知之者次也、困而學之又其次也、困而不學、民斯爲下矣、

一〇、孔子曰、君子有九思、視思明、聽思聰、色思溫、貌思恭、言思忠、事思敬、疑思問、忿思難、見得思義、

一一、孔子曰、見善如不及、見不善如探湯、吾見其人矣、吾聞其語矣、○見善如不及、見不善如探湯、及び隱居以求其志、行義以達其道の二語は蓋し古語、

一二、齊景公有馬千駟、死之日民無得而稱焉、伯夷叔齊餓于首陽之下、民到于今稱之、其斯謂與、○程氏云、此章の首に詩云、誠不以富、亦祇以異、孔子曰の十三字を脱す、顔淵篇第十章參照、

一三、陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎、對曰、未也、嘗獨立、鯉趨而過、○唐石經得を德に作る、得は德の借字、  
○唐石經斯の下之の字あり、

八、孔子曰く、君子に三の畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る。

九、孔子曰く、生れながらにして知る者は上なり、學びて知る者は次なり、困みて學ぶは又その次なり、困みて學ばざる、民これを下となす。

一〇、孔子曰く、君子に九の思ふことあり。視は明かならむことを思ひ、聽は聰からむことを思ひ、色は温ならむことを思ひ、貌は恭からむことを思ひ、言は忠あらむことを思ひ、事は敬まむことを思ひ、疑はしきは問はむことを思ひ、忿には難を思ひ、得るを見ては義を思ふ。

一一、孔子曰く、善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては湯を探るが如くすとは吾その人を見たり、吾その語を聞けり。隱居して以てその志を求(終)へ、義を行ひて以てその道に達すとは、吾その語を聞けるも、未だその人を見ず。

一二、「詩に云く、「誠に富を以てせず、亦祇に異を以てす」と、孔子曰く、「齊の景公〔馬を好み〕馬千駟(四千疋)を有せしも、死せる日、民徳として稱るなく、伯夷叔齊首陽の下に餓て、民今に到るまでこれを稱るは、それこの謂か。」

一三、陳亢伯魚に問ひて曰く、子も亦異聞あるか。對へて曰く、未だなし、「然れども父君」



庭、曰、學詩乎、對曰、未也、曰、不學詩無以言也、鯉退而學詩、他日又獨立、鯉趨而過庭、曰、學禮乎、對曰、未也、不學禮無以立也、鯉退而學禮、聞斯二矣、陳亢退喜曰、問一得三、聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也、

○矣、唐石經矣を者に作り、陳亢退の下而の字あり、

一四、邦君之妻、君稱之曰夫人、夫人自稱曰小童、邦人稱之曰君夫人、稱諸異邦曰寡小君、異邦人稱之亦曰君夫人也、

嘗て獨り立ちたまへるとき、鯉（伯魚の名）趨りて庭を過ぐれば、詩を學びたるかとのたまふ。對へて未だせずといへば、詩を學ばざれば以て言ものいこと無けむ（と諭さとしたまへり）、鯉（こゝに於て）退いて詩を學べり。他日又獨り立ちたまふ。鯉趨りて庭を過ぐれば禮を學びたるかとのたまふ。對へて未だせずといへば、禮を學ばざれば以て立つこと無けむ（と諭し給へり）。鯉（こゝに於いて）退いて禮を學べり。斯この二つの者ことを聞けるのみと。陳亢退いて喜びて曰く、「吾伯魚に」一のことを聞きて三のことに得たり、詩を聞き、禮を聞き、又君子のその子を遠ざけたまふを聞けりと。

一四、邦君の妻は、君これを稱するとき夫人といひ、夫人自ら稱するとき小童といひ、邦人これを稱するとき君夫人といひ、これを異邦に稱するときは寡小君といひ、異邦の人これを稱するときも亦君夫人といふ。



一、子曰：「君子欲讷於言而敏於行。」

二、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

三、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

四、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

五、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

六、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

七、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

八、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

九、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

十、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

論語卷第九

一、子曰：「君子欲讷於言而敏於行。」

二、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

三、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

四、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

五、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

六、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

七、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

八、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」

九、子曰：「君子食则思，寝则思，言必忠信，行必笃敬。」

十、子曰：「君子居则贵其身而不可乱，动则敬其民而不可侮。」



論語陽貨第十七 何晏集解 凡二十六章

一、陽貨欲見孔子、孔子不見、歸孔子豚、孔子時其亡也、而往拜之、遇諸塗、謂孔子曰、來、予與爾言、曰、懷其寶而迷其邦、可謂仁乎、曰、不可、好從事而亟失時、可謂智乎、曰、不可、日月逝矣、歲不我與、孔子曰、諾、吾將仕矣、

○釋文云、歸、鄭本饋に作る、史記世家遺に作る、皆贈の意なり、  
○孟子滕文公篇此事を述ぶ時を闕に作る、時は何の借字、  
○論衡實知篇塗を途に作る、  
○唐石經智を知に作る、

二、子曰、性相近也、習相遠也、

三、子曰、唯上知與下愚不移、

四、子之武城、聞絃歌之聲、夫子莞爾而笑曰、割雞焉用牛刀、子游對

○釋文云、莞爾一本莞爾に作る、莧は正字、莞は借字、微笑の貌、

論語陽貨第十七 凡二十六章

一、陽貨孔子を見むと欲す、孔子見えず、孔子に豚を歸(饋)る。孔子其亡きを時(伺)ひて往きて之を拜せるとき、塗(途)に遇へり。「陽貨」孔子に謂つて曰く、來れ、予爾と言らむ、曰く、その寶を懷いてその邦を迷はすは仁といふべきか、不可といふべし、事に従はむことを好みて、亟時を失ふは智といふべきか、不可といふべし、月逝いて歲我與ならず、「速かに仕ふべきなり」と。孔子「敢て逆らはずして」諾、吾將に仕へむと曰へり。

二、子曰く、性は相近きも、習ふときは相遠ざかる。

三、子曰く、「人皆習ひて善となるべく、習ひて惡となるべし」、唯上知と下愚とは移つらず。

四、子武城に之き絃歌の聲を聞く。夫子莞爾として笑ひて曰く、雞を割くに焉ぞ牛刀を用ゐむ。子游對へて曰く、昔者、偃、これを夫子に聞けり、曰く、君子道を學べば則ち



曰、昔者偃也、聞諸夫子、曰、君子學道則愛人、小人學道則易使也、子曰、二三子、偃之言是也、前言戲之耳、

五、公山不擾以費畔、召子欲往、子路不悅曰未之也巳、何必公山氏之之也、子曰、夫召我者、而豈徒哉、如有用我者、吾其爲東周乎、

六、子張問仁於孔子、孔子對曰、能行五者於天下爲仁矣、請問之、曰、

恭、寬、信、敏、惠、恭則不侮、寬則得衆、信則人任焉、敏則有功、惠則足以使人、

七、腓肸召子欲往、子路曰、昔者由也聞諸夫子、曰、親於其身爲不善者、君子不入也、腓肸以中牟畔、子之往也如之何、子曰、然、有是言也、回不曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇、吾豈匏瓜也哉、焉能繫而不食、

○唐石經不擾弗擾に作り史記不紐に作る、  
○唐石經、悅説に作り、未末に作る、末とは無なり、

○腓、唐石經佛に作る、  
○親於其身、史記世家其身親の三字に作る、

人を愛し、小人道を學べば則ち使ひ易しと。子曰く、二三子よ、偃の言是し、前の言は戲しのみ。

五、公山不擾、費に以て〔季氏に〕畔き、子を召す。〔子〕往かむと欲す。子路説〔悅〕ばずして曰く、之くこと未れ、何ぞ必ずしも公山氏のもとに之かむや。子曰く、夫我を召すもの、豈徒からむや。如し我を用ふるあらば、吾はそれ東周を爲さむか、〔周道を東方魯に興さむか〕。

六、子張仁を孔子に問ふ。孔子對へて曰く、能く五つのものを天下に行ふを仁となす。〔子張〕之〔五者〕を請ひ問ふ。〔子〕曰く、恭と寬と信と敏と惠となり、恭なれば則ち侮られず、寬なれば則ち衆を得、信あれば則ち人これを任じ、敏なれば則ち功あり、惠なれば則ち以て人を使ふに足る。

七、腓肸子を召す、〔子〕往かむと欲す。子路曰く、昔者、由はこれを夫子に聞けり、曰く、親らその身に於いて不善をなせるものには君子入らずと、〔今〕腓肸中牟に以て畔けるに、子の往かむとし給ふは如何ぞや。子曰く、然れども〔また〕是き言もあり、曰く、堅しといはざらむや磨ども磷がざるもの、白しといはざらむや涅れども緇まざるものと。吾豈匏瓜ならむや、焉ぞ能く〔一所に〕繋りて食〔用〕られざらむ。



八、子曰、由汝聞六言六蔽矣乎、對曰、未也、居、吾語汝、好仁不好學、

○唐石經、汝女に作り、その上也の字あり、

其蔽也愚、好智不好學、其蔽也蕩、好信不好學、其蔽也賊、好直

○唐石經、智を知に作る、

不好學、其蔽也絞、好勇不好學、其蔽也亂、好剛不好學、其蔽也

狂、

九、子曰、小子何莫學夫詩、詩可以興、可以觀、可以群、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於鳥獸草木之名、

一〇、子謂伯魚曰、女爲周南邵南矣乎、人而不爲周南邵南、其猶正牆

○唐石經、邵を召に作る、

面而立也與、

一一、子曰、禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉、

○王引之云、云乎は語已詞なり、

一二、子曰、色厲而內荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也與、

○窬は踰の借字こゆる也、

八、子曰く、由よ、汝六言六蔽を聞けりや。對へて曰く、未だせず。居れ、吾汝に語らむ。

仁を好みて學を好まざれば、其蔽は愚なり。智を好みて學を好まざれば、其蔽は蕩

なり。信を好みて學を好まざれば、其蔽は賊ふ。直を好みて學を好まざれば、其蔽は

絞る。勇を好みて學を好まざれば、其蔽は亂す。剛を好みて學を好まざれば、其蔽は

ものぐるは

狂し。

九、子曰く、小子何ぞ夫詩を學ぶことなき、詩は以て「人事を」興るべく、以て「風俗を」

觀るべく、以て「朋友を」群むべく、以て「時政を」怨むべく、邇くしては父に事へ、

遠くしては君に事へ、多く鳥獸草木の名を識るべし。

一〇、子、伯魚に謂つて曰く、女（汝）周南邵南「の詩」を爲（學）たるか、「周南邵南は三

綱の首王教の基」、人にして周南邵南を爲されば、猶牆に正（當）り面（向）ひて立て

るがごときか、「焉ぞ行むを得む」。

一一、子曰く、禮といひ禮といふも、玉帛ならむや、樂といひ樂といふも、鐘鼓ならむや、

「禮は敬を以て本となすべく、樂は和を以て本となすべし」。

一二、子曰く、色（容貌）厲しくして、内（心）荏なるは、これを小人に譬は、それ猶「壁

を」穿ち「牆を」窬る盜の如きか。



一三、子曰、郷原德之賊也、

一四、子曰、道聽而塗說、德之棄者也、

一五、子曰、鄙夫可與事君哉、其未得之也、患得之、既得之、患失之、苟患失之、無所不至矣、

一六、子曰、古者民有三疾、今也或是之亡也、古之狂也肆、今之狂也蕩、

古之矜也廉、今之矜也忿戾、古之愚也直、今之愚也詐而已矣、

一七、子曰、巧言令色、鮮矣仁、

一八、子曰、惡紫之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也、惡利口之覆邦家、

一九、子曰、予欲無言、子貢曰、子如不言、則小子何述焉、子曰、天何言

哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉、

二〇、孺悲欲見孔子、孔子辭以疾、將命者出戶、取瑟而歌、使之聞之、

○郷原、中論考偽篇郷原に作る、

○郷原、中論考偽篇郷原に作る、愿とは善也、一郷の人に皆善しと稱せらる、八方美人を郷原といふ也、

○唐石經棄を弃に作る、

○匡謬正俗引、與を以に作る、王引之云、與は以と同じ、

○唐石經君下也與の二字あり、

○患得之、荀子子道篇、說苑雜言篇引、憂不得に作る、此本不の字を脱す、

○或は助辭にて意味なし、

○唐石經此章傍添、

○唐石經章末者の字あり、者は也と同義、

○釋文云、魯論天を夫となす、

一三、子曰く、郷原は徳の賊なり。

一四、子曰く、道に聽きて塗(途)に説き「深く考へざる人は」徳の棄たるなり。

一五、子曰く、鄙夫は與(以)て君に事ふべけんや、その未だ之(位)を得ざる時は、得ざるを患へ、既に得るときは、失はむことを患ふ、苟くも失はむことを患ふときは

〔詔佞邪媚〕至らざる所なし。

一六、子曰く、古者は民に三疾ありしが今也は或是(祇)之すら亡きなり。古の狂は肆にす、今の狂は蕩なり。古の矜は廉し、今の矜は忿戾ふ。古の愚は直し、今の愚は詐はるのみ。

一七、子曰く、言を巧し色を令する「人」は鮮し仁あること。

一八、子曰く、紫の朱を奪ふを惡む、鄭聲の雅樂を亂るを惡む。利口の邦家を覆すを惡む。

一九、子曰く、予言ふなからむと欲す。子貢曰く、子如し言はずんば、小子何をか述べむ。

子曰く、天何をか言はむ、「然ども」四時行はれ百物生る、天何をか言はむ。

二〇、孺悲孔子に見えむとす、孔子辭するに疾を以てす。命を將もの戸を出づ。瑟を取つて

歌ひ之(孺悲)をして聞かしむ。



二一、宰我问、三年之喪期已久矣、君子三年不爲禮、禮必壞、三年不爲樂、樂必崩、舊穀既沒、新穀既升、鑽燧改火、期可已矣、子曰、食夫稻、衣夫錦、於女安乎、曰、安、女安則爲之、夫君子之居喪、食旨不甘、聞樂不樂、居處不安、故不爲也、今女安則爲之、宰我出、子曰、予之不仁也、子生三年、然後免於父母之懷、夫三年之喪、天下之通喪也、予也有三年之愛於其父母乎、

○釋文云、期一本其に作る、蓋し期は其の借字、已は甚と同一、  
○燧は火を取る木、古は四時に従つて異なる木より火を取る、

○漢石經章末乎の字なし、

二二、子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉、不有博奕者乎、爲之猶賢乎已、

二三、子路曰、君子尚勇乎、子曰、君子義以爲上、君子有勇而無義爲亂、

小人勇而無義爲盜、

二四、子貢問曰、君子亦有惡乎、子曰、有惡、惡稱人之惡者、惡居下流

而訕上者、惡勇而無禮者、惡果敢而窒者、曰、賜也亦有惡也、惡微以爲智者、惡不遜以爲勇者、惡訐以爲直者、

○漢石經君子有惡乎子曰有に作る、

○漢石經流の字なし、

○室、唐石經室に作る、室窒古相通、窒とは忿戾なり、

○唐石經也を乎に智を知に、遜を孫に作る、

二一、宰我问ふ、三年の喪は、期(其)已だ久し。君子三年禮を爲さざれば、禮必ず壞る、

三年樂を爲さざれば樂必ず崩る、舊穀既に沒て新穀既に升る、燧を鑽り火を改む期

(一年)にして可ならむ。子曰く、夫稻を食ひ、夫錦を衣むこと、女(汝)に於て安き

か。曰く、安し。女(汝)安ければ則ちこれを爲せ。それ君子の喪に居るや旨を食ふ

も甘からず、樂を聞くも樂しからず、處に居るも安からず、故に爲さざるなり、今女

(汝)安ければ則ち之を爲せ。宰我出づ。子曰く、予(宰我の名)の不仁なる、子生れ

て三年、然して後父母の懷を免る、夫れ三年の喪は天下の通喪なり、予も三年の愛其

父母にあるべし。

二二、子曰く、飽くまで食ひて、終日心を用ゐる所なきは難いかな。博奕といふもの有らず

や、之を爲すは猶已むに賢れり。

二三、子路曰く、君子は勇を尚ぶか。子曰く、君子は義以て上と爲す、君子勇ありて義なき

ときは亂を爲す、小人勇ありて義なきときは盜を爲す。

九二四、子貢問ひて曰く、君子も亦惡むあるか。子曰く、惡むあり、人の惡を稱する者を惡む、

下に居て上を訕る者を惡む、勇にして禮なき者を惡む、果敢にして窒る者を惡む、曰

く、賜も亦惡むあり、微りて以て智と爲す者を惡む、不遜にして以て勇と爲す者を惡



二五、子曰、唯女子與小人、爲難養也、近之則不遜、遠之則怨、  
二六、子曰、年四十而見惡焉、其終也已、

○唐石經遜を孫に作る、  
○俞樾云、惡は誣の借字、譏  
るなり、

論語微子第十八

何晏集解 凡十一章

- 一、微子去之、箕子爲之奴、比干諫而死、孔子曰、殷有三仁焉、
- 二、柳下惠爲士師、三黜、人曰、子未可以去乎、曰、直道而事人、焉往而不三黜、枉道而事人、何必去父母之邦、
- 三、齊景公待孔子曰、若季氏則吾不能、以季孟之間待之、曰、吾老矣、不能用也、孔子行、

○漢石經邦を國に作る、

- む、あはき 誣て以て直となす者ひとを惡む。
- 二五、子曰く、唯女子と小人とは養ひ難しと爲す、之を近づぐれば則ち不遜なり、之を遠ざくれば則ち怨む。
- 二六、子曰く、年四十にして惡そし（誣）らるる「人は」それ終ぬるかな。

論語微子第十八

凡十一章

- 一、「殷紂道なく」微子は去り、箕子は奴となり、比干は諫めて死せり、「三子おこなひ行異なるも同じく仁と稱すべし」。孔子曰く、殷に三仁あり。
- 二、柳下惠士師となり三たび黜しりぞけらる。「或る」人曰く、子未だ以て去るべからざるか。曰く、道に直ま（縁）つて人に事へむとすれば、焉いづくに往くとしてか三たび黜けられざらむ、道を枉まげて人に事へむとすれば何ぞ必ずしも父母の邦くにを去らむ。
- 三、齊の景公孔子を待たむとして曰く、季氏の若ごとくせむことは則ち吾能はざるも、季〔氏〕孟〔氏〕の間を以て之を待たむと。「既にして約を果はたす能はず」、曰く、吾老いたり用



四、齊人歸女樂、季桓子受之、三日不朝、孔子行、

五、楚狂接輿歌而過孔子之門、曰、鳳兮鳳兮、何德之衰也、往者不可諫也、來者猶可追也、已而已而、今之從政者殆而、孔子下欲與之言、趨而避之、不得與之言、

六、長沮桀溺耦而耕、孔子過之、使子路問津焉、長沮曰、夫執輿者爲誰、子路曰、爲孔丘、曰、是魯孔丘與、對曰是也、曰是知津焉、問於桀溺、桀溺曰、子爲誰、曰爲仲由、曰是魯孔丘之徒與、對曰、然、曰滔滔者天下皆是也、而誰以易之、且而與其從辟人之士、豈若從辟世之士哉、耒而不輟、子路行以告、夫子憮然曰、鳥獸不可與同群也、吾非斯人之徒與而誰與、天下有道丘不與易也、

○釋文云、歸鄭本饋に作る、

○漢石經何下而の字あり、何而は何如と同じ、莊子人間世篇何如に作る、

○唐石經兩也の字なし、漢石經あり、此本と同じ、

○唐石經避を辟に作る、

○史記世家夫を彼に作り、漢石經輿を車に作り、誰下子の字あり、蓋し夫彼同義、輿車通用、誰子當に誰乎に作るべし、

○唐石經對の字なく漢石經是の下也曰の二字なく、史記世家是也を然に作る、

○唐石經、焉を矣に作る、

○釋文孔丘孔子に作る、

○滔滔、史記世家及鄭本悠悠に作る、蓋し古論は悠悠、魯論は滔滔に作る、悠悠は周流の貌、滔滔も同じ意、

○唐石經士下也の字あり、

○釋文及漢石經耒を耒に作る、耒は耒の異字、

○釋石經行の字夫の字なし、

ある能はずと。孔子行る。

四、齊人女樂を歸る、季桓子これを受けしめ〔君臣ともに觀て〕三日朝せず。孔子行る。  
五、楚の狂〔人〕接輿歌つて孔子の門を過ぎて曰く、鳳よ鳳よ、何ぞ徳の衰へたる、往にしことは諫〔止〕むべからざるも、來らむことは猶追〔治〕べし、已而やめよ、今の政に従はむことは殆ければ。孔子〔堂を〕下りてこれと言らむとすれば、趨りて避け之と言るを得ず。

六、長沮桀溺耦で耕す、孔子これを過ぎ子路をして津を問はしむ。長沮曰く、夫輿〔車〕を執〔守〕者は誰と爲す。子路曰く、孔丘となす。曰く、是魯の孔丘か。對へて曰く是〔然〕。曰く、是ならば〔問はずとも〕津を知るべし。桀溺に問ふ。桀溺曰く、子は誰となす。曰く、仲由となす。曰く、是魯の孔丘の徒か。對へて曰く、然り。曰く、滔滔者よ、天下は皆是し、而〔汝〕誰と以〔輿〕にかこれを易めむ。且つ而はそれ人を辟くる士〔即ち孔子〕に従はんよりは、豈、世を辟くる士〔即ち長沮桀溺の如き隱者〕に従ふに若かむやとて、耒て輟めず。子路行いて〔孔子に〕告ぐ。夫子憮然として曰く、鳥獸とは與に群を同じくすべからず、吾は斯人〔天下の人〕の徒に與するにあらずして誰にか與せむ。天下道あるときは丘が易むるを與〔用〕みず、〔道なきが